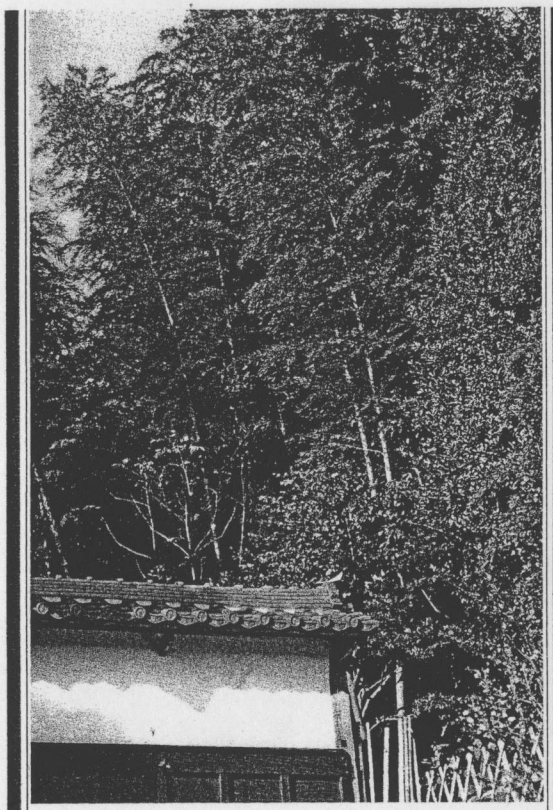


わが郷土

大森・森孝新田

発刊にあたって

独立開校を記念して、大森・森孝の郷土史を発刊することになりました。しかし、この発刊は、学校側が意図的に計画したものでなく、地域の皆さん方の助言・希望・ムードが、つぎつぎに、新しい編集の意欲をかきたてできたものです。

事実、現在まで大森地区について歴史的にまとめたものがなく、その上、都市化による地域の変化が年々急ピッチで、史料も分散しており、今がまとめるには最後のチャンスであると考えたからです。

さて、現在のように合理化され、機械化された日常の生活から見れば、昔の生活はしげきが少く、実につらいことが多かったと思います。土地にしばりつけられた農民の生活などわたしたちの想像を超えるものであったと思います。ただ生きのびるため、その時代にあった精一杯の努力があったのです。そうした労働と忍苦が「今日」を築いたものと言えます。祭礼などに寄せる情熱も、現代人にとって異常と思われる点が多いように思われがちですが、むしろ、そこに自然に密着した素ぼくさがうかがえるのです。

近頃「自然に親しむ」とか、「自然に学ぶ」とか強調されるのは、きっと現代人の一番弱点である生命力の弱さを人々が痛感しているからだと思うのです。

ここにかかげられた内容は、四世紀の古墳時代から、新幹線の走る現代に至るまで、歴史の中に発展しつづけてきた郷土の歴史です。

ここでわたしたちは、明日への歩みを確かなものとするためにも、過去をふりかえる努力をし、歴史的事実に立った物の考え方を大切にしたいと思います。

あくまでこの内容は、教室で使用する指導資料として、生徒むけにまとめたものであります。したがって、不確実な点については極力省きましたし、一部の事項についてのみ、詳細に記述するといったことも避けた次第です。また、視覚教材を豊富に載せたいということで、多くの写真をとりましたが、紙面の都合で掲載ができませんでした。その上、半年間という短期日の企画でありましたので、不備な点も多かろうと思います。順次訂正、加筆して立派なものにしていきたいと思いますので、よろしくご指導下さい。

特に、資料作成にご助言いただきました多くの皆さん方のご好意、発刊に際してご援助いただきました大森土地区画整理組合のご厚志に、心から敬意と謝意を表します。

なんとしても、大森中学の生徒を強くしたいのです。しあわせにしたいのです。生きがいを持たせたいのです。それだけが、わたしたち教師や親の願いであります。

この発刊もそれが出発点であることを付記し、この資料が、この願いに沿うべく活用されることを念願してやみません。

昭和50年11月20日

名古屋市立大森中学校長

袴田　秀男

郷土

大森・森孝新田

発刊にあたって（袴田秀男）―― 2

大森と森孝新田
――序にかえて―― 4

大森の由来 5

古墳と中世の頃
古墳の話 6
斎忌斎田 8
山田次郎重忠 8
大森城 8
黄金伝説 9

白山林の激戦
大森の受難 11

歓喜院乾の御方 12

江戸時代のくらし
元郷 13
新田開発 13
森孝新田の古道 14
森孝新田の開発 15
農民の生活 16
用水の話 17

幕末から明治へ
文明開化 18
大森郵便局 18
大森寺炎上 19
瀬戸街道 20
瀬戸電物語 21

激動の昭和史幕あけ
月ケ丘分譲地 21
昭和の斎田 21
守山大空襲 21
晴着を血に染めて（瀬戸電大事故） 22

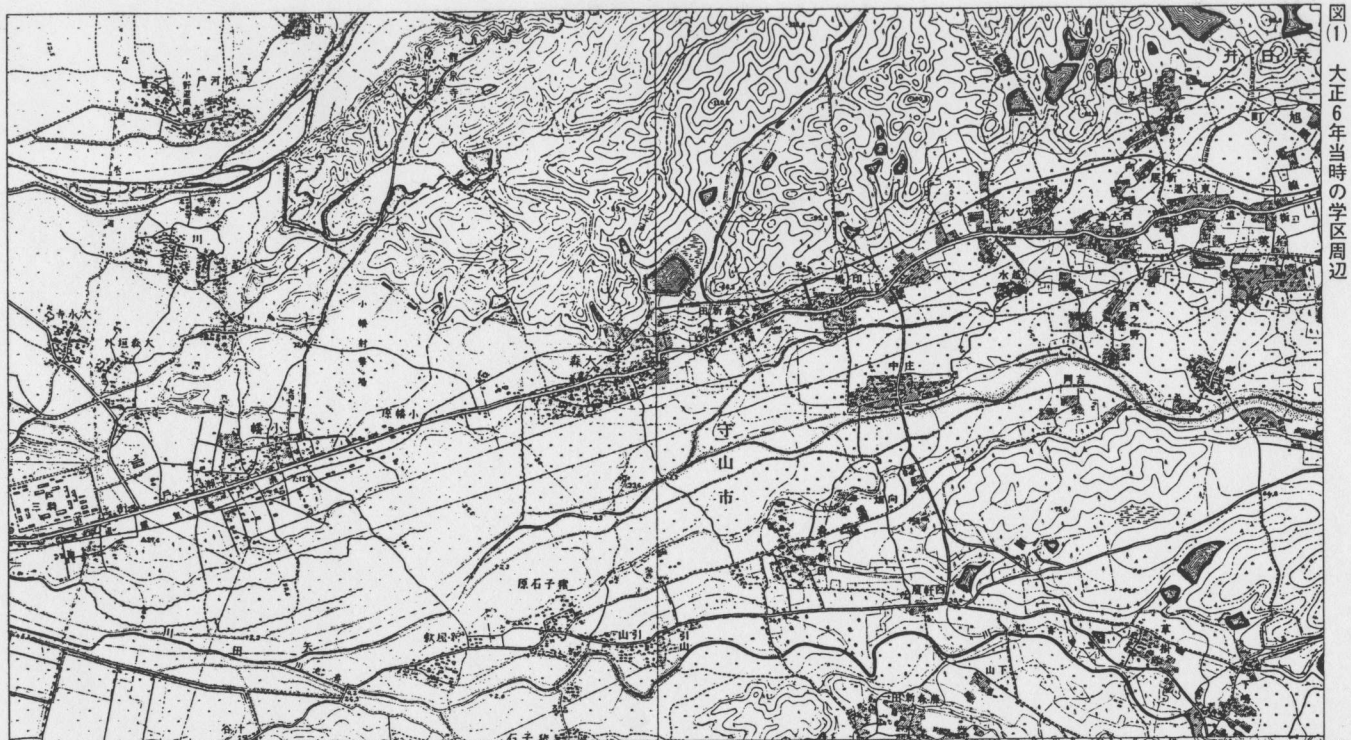
郷土の文化財
山車と棒の手 24
大森合宿（おまんと） 24

大森・森孝歴史遊歩道
八劔神社・弁財天と奥の院・龍神社・大森寺 26
法輪寺 27
瀬戸街道・円空仏の観音堂 28
大塚古墳・勘解由塚・おさ塚・三十三観音周辺・猪子石 29
小幡・大森橋周辺 30

年表 30

あとがき 32

■編さん／執筆／発行＝名古屋市立大森中学校


守山市
名古屋市
中庄
門倉
西之野
木場
新居
旭町
北原山
東大道
西大道
八瀬ノ木
印場
稲葉
吉岡
白山
本地ヶ原
黒石
下山
北山
西島
山下
猪子石
大森
大森新田
大森南
緑丘ゴルフ場
緑丘
緑ヶ丘
緑ヶ丘八丁目
緑ヶ丘七丁目
緑ヶ丘六丁目
緑ヶ丘五丁目
緑ヶ丘四丁目
緑ヶ丘三丁目
緑ヶ丘二丁目
緑ヶ丘一丁目
緑ヶ丘公園
緑ヶ丘ゴルフ場
緑ヶ丘ゴルフ場
緑ヶ丘ゴルフ場

大森と森孝新田

――序にかえて――

わが大森中学の学区は、大森と森孝新田の二区から成り立っています。地勢を見ますと、東西に流れる矢田川の両岸に沿ってのびる平地を中心として、北部は志段味方面につらなる丘陵地、南部は矢田川と香流川とに挟まれて本地が原から猪子石原にのびた台地の一部から成り立っています。

大森は古くから人が住み、江戸時代には大森村と呼ばれていました。白山をふくむ森孝地区は、台地のため水の便がわるく、人々が住むようになったのは比較的新しいことのようです。昔から大森の支村とみなされていたようで、江戸時代の文書にも独立した村として森孝新田は扱われておりません。東春日井郡誌によりますと、明治維新のころになっても正式な村名として大森村はありますが、森孝新田の名は出てきません。明治十三年に春日井郡を東西二郡に分けたとき、東春日井郡の村名の中に森孝新田の名がはじめて見られます。ついで明治十七年八月一日、町村役場設定当時の村名の中に、森孝新田が載っています。つまり森孝新田にも村役場が設立されたということです。ところが明治二十二年に森孝新田は大森村に合併されてしまいます。独立した村としての森孝新田はわずか十年たらずで終ってしまいました。しかしその大森村も明治三十九年までしか続きませんでした。この年は全国的に大規模な町村合併が強行され、大森村は小幡村などと共に守山町の一部となってしまいました。そしてこの状態は長く続き、昭和二十九年になって守山町は志段味村を合併して守山市となり、さらに昭和三十八年に守山市は名古屋市の一部となって守山区になりました。

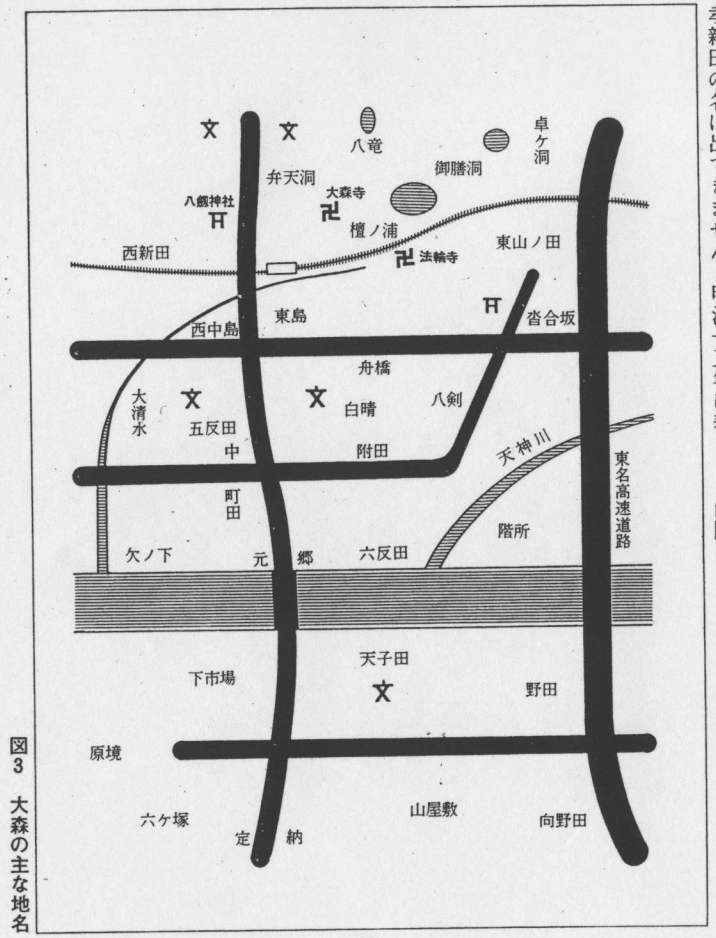


図3　大森の主な地名

大森には小学校は明治時代からありましたが、戦後の学制改革によって生れた新制中学校は最近までありませんでした。大森・森孝地区の中学生は小幡の守山東中学校まではるばる通学していたのは皆さんがよくご存知のことです。昭和五十年四月、大森中学校が開校されて通学の不便はいくらか解消されました。しかしそれよりも意義深いことは、明治三十九年以前の大森村の区域が一つの中学区として再びまとまることができたことです。ここで私たちは大森・森孝新田がたどってきた足あとをふりかえってみるのも意義あることだと思います。

大森の由来

地名としての大森がどのようにして成立したいつごろからそう呼ばれるようになったかははっきりわかりません。大森という文字から考えて、昔大きな森でもあったのかと思うのは自然なことです。「尾張地名考」という江戸時代の書物に

大森村　地名　正字なるべし

とあるのも不思議はないでしょう。しかし地名は長い間に発音が変化しますし、文字もあて字が多く、その由来を簡単に決めてしまうのも考えものです。何か別の由来があるかも知れないからです。日本全国には大森という地名はかなりたくさんあるようです。その中でわが大森に比較的近く、地形もよく似ているのをあげると、

滋賀県蒲生郡蒲生町大森
岐阜県山県郡伊自良村大森
同　可児郡可児町大森
福井県丹生郡清水町大森
同　坂井郡丸岡町大森

などがあります。

これらの地名を五万分の一の地形図で調べてみますと、一方は丘陵となり、もう一方はやや広く開けて川が流れています。今はすっかり都市化されてしまって、もとの地形がどのようであったのかくわしくはわかりませんが、東京の大森なども、片側は丘陵、もう一方は海となってひらけていた土地だと思われます。

古墳と中世の頃

古墳の話

明治十年にアメリカ人のモースという人が東京の大森ではじめて貝塚を発掘しました。これがわが国の考古学の草分けなのだそうです。わが大森の周辺も地形から考えて古くから人が住み、古代の遺跡と伝えられるものが数多く残されていました。志段味の東谷山から小幡にかけての古墳群は有名で、今までに何度も調査研究が行なわれてきました。近ごろは開発の波によって数が減ってしまいましたが、昔はもっとたくさんの古墳があったそうです。小幡古墳群について大森に近いところだけをあげてみますと、名鉄喜多山駅北方にある二つの古墳です。長塚古墳・池下古墳といい、どちらも前方後円墳です。長塚古墳はよく整備されていますが、池下古墳は荒れ放題なのが気になります。

さてわが大森地内はどうでしょうか。守山市史によりますと、大森古墳群として四基ばかり古墳群があったそうですが、昭和十年ごろ平地化されて耕地になってしまったと書かれています。整地組合でもっとくわしいことを聞きますと、およそつぎの事実がわかりました。（第五図参照）

一、西新田の両端、名鉄瀬戸線と偶除川（すみよけがわ）に挟まれて大塚と呼ぶ古墳が最近まであったが、区画整理のため消滅した。

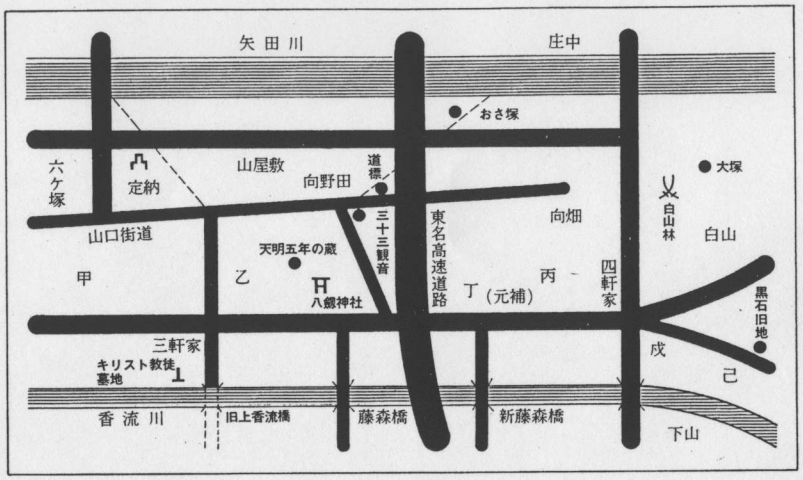


図4 【森孝新田の主な地名】

このような地形を持った土地がどうして大森と呼ばれるようになったのでしょうか。やはりよくわかりませんが、すくなくとも「森」については、神社の森のように木の茂る所という意味のほかに、「盛り」から転じたものとも考えられます。すなわち「盛り上がる」のもりで、うず高くなったところという意味です。四国の地図をよく見ますと、「……森」という山があちこちに見られます。著名な民俗学者の柳田国男氏は「もりとは峰の名である」と書いています。大森の森の意味をこのようにとれば、今、金城大学がある山がさしあたってそれに相当するわけです。守山の守も昔は森山と書いたそうです。木が茂った山という意味かも知れませんし、盛上った山の意味かも知れません。守山は志段味や大森の方から続く台地の先端にあります。矢田川の下流の方からやって来ると、まず「森山」が目につきます。小幡あたりは野原ですのであまり目立ちませんが、大森までやって来ると左手の丘陵が急に高くなります。そのようなわけで大森という名がその地につけられたと考えてもいいのではないでしょうか。

とにかく大森に関するかぎり、その地名の由来は、背後の山に関係がありそうです。なお森孝新田についてはあとで述べます。

一、大塚のすぐ東に石の矢じりが出る場所があったが、これも区画整理で消滅。

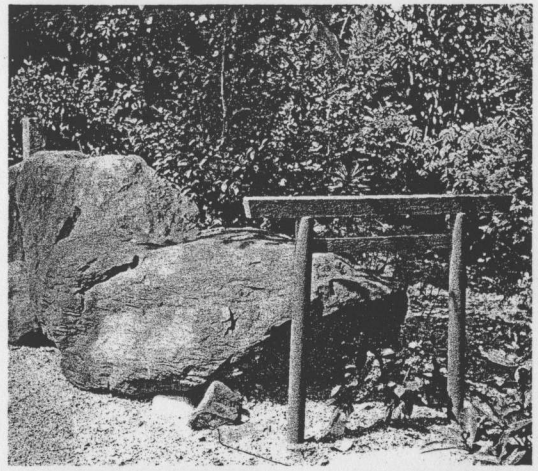
一、瀬戸街道のすぐ南大清水の環状二号線の用地になっているところに西の池という小さい池があったが、そのすぐ東側に「先生塚」と呼ばれる古い墓地があり、整地の時古い土器の破片を発見。その一部は整地組合に保管されている。ここは中世大森を支配した尾関一族の墓とも伝えられ、また長久手合戦で戦死した武士の墓とも言われているので、出土した土器がいつのものか調査しなければわからない。

一、大森西南端の猪子石原に続く「六ケ塚」には、地名が示すようにかって塚があったが、戦前このあたりに瓦の製造所があって、その原料の土取り場となり、やはり消滅した。鎧（よろい）の一部が出たと言われ、長久手合戦のときの塚かも知れない。

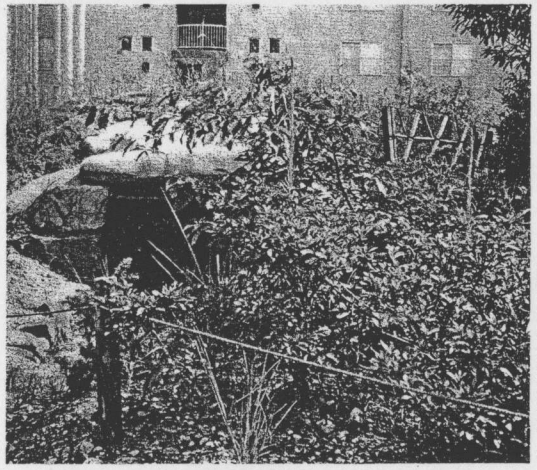
一、今の天子田小学校のすぐ南西にあたる田の中に「ねぎどん塚」があった。東方に向ってひょうたん型をしていたそうで前方後円墳と思われる。これも区画整理で消滅した。

一、今農林省建設部の敷地になっている所に「狐塚」と呼ばれる古墳があり、巨石がそのまま埋められているとのことである

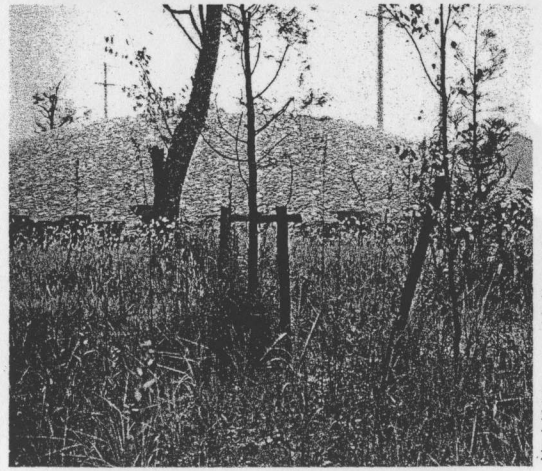
【おさ塚古墳】



尾張旭市に移された黒石



団地の中の天狗岩古墳



見事に復元された大塚古墳

一、猪子石街道のすこし北、東名高速道路の西側に「大塚」があった。赤土のため壁土に取られて石室が露出したとのこと

やはり今はない。

一、県営大森向住宅の南西に一基、東名高速道路の敷地となった所に二基古墳があったが今はない。古代のものか、長久手合戦時のものかわからない。

一、「野田」の東端、東名高速道路の東側の尾張旭市との境に、「おさ塚」という古墳が残っている。樹木が茂っていて形はよくわからないが、東西に長いようである。ほかの古墳がほとんど破壊されたあとだけに、この古墳の存在は貴重であるぜひとも末長く保存したいものである。

つぎに学区の東部四軒家白山地区に目を向けてみました。地元の人の話や、尾張旭市史を調べた結果、つぎのことが判明しました。

一、四軒家から南東へ、長久手境の名鉄黒石バス停の近くに黒石一号および二号墳があったがすでに消滅し、その石室に使われていたと思われる黒い石が県道沿いにあって、小さな祠が祭られていたが、森孝住宅の工事で石は尾張旭市の本地原小学校の近くの神社に移された。

一、四軒家交差点の南東の田の中に地元の人も塚と呼んでいる少し盛り上がった場所がある。附近の田は休耕田となって夏草が生い茂り、近寄る道もなくてくわしいことはわからない。

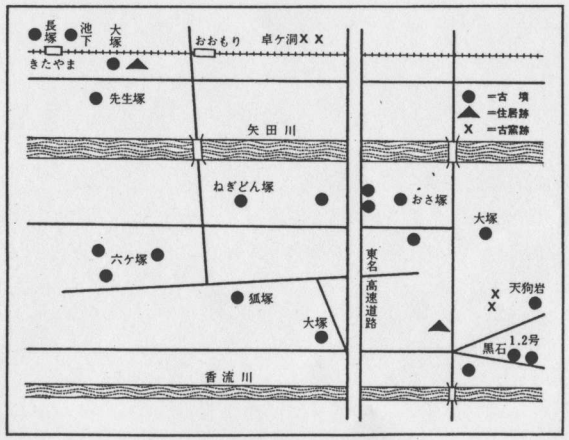
一、市営本地が丘団地から東へ続く尾張旭市内の住宅を登りつめた東端、いわゆる白山のもっとも高い場所に天狗岩古墳という石室を持った古墳が保存されている。このあたりには白山古墳とか長坂古墳という古墳が集中的に存在していたそうで尾張旭市一帯を一望に収めることができ当時周辺の古代祭祀の中心であったという。「聖なる白山」と尾張旭市史にも書かれている。

一、本地が丘団地西北下の庄中向に、やはり大塚と呼ばれる古墳が見事に復元保存されている。専門の考古学者の調査によると五世紀のものだそうで、石室はなかったとのこと。塚のすぐ隣には古代住居も復元されており、これらは地元の加藤一之氏の努力が大きいといわれている。

一、四軒家の北、県道の西側の尾張旭市内に古代住居跡が発見されたが、整地のために消滅した。

一、本地が丘団地の三十棟、三十一棟の西側の斜面に古窯跡があり、団地建設の時名古屋市によって発掘されたが保存はされなかったとのこと。なお北部の霞ケ丘にも、卓ケ洞古窯群があったとのことである。

以上のようにわが学区の古墳は「おさ塚」と四軒家東南方の一基を除いてほとんど消滅してしまったようです。破壊されてしまったものは元へもどすことができません。今後学区内に残された古い貴重なものを、私たちの努力でできるだけ大切にしぜひ後世に残したいものです。



図(5) 古墳分布図

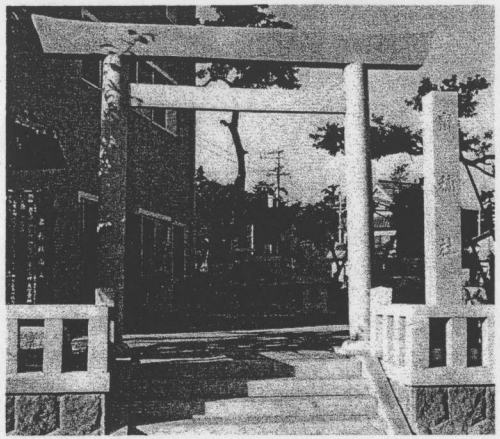
斎忌斎田

このあたりのことが文書に記載されたもっとも古い記録は、おそらく日本書記の天武五年（六七六）九月二十一日の頃でしょう。少しむずかしいのですが引用してみましょう。

神祇官奏曰、為新嘗卜国郡也、斎忌則尾張国山田郡……

斎忌は悠紀とも書き「ゆき」と読みます。

天皇が新穀を神々に供える祭事のため、その新穀を奉る国郡のことです。斎場を左右（東西）に分けそのうち左方、すなわち都より東にあたる国郡を斎忌といい、右方すなわち都より西にあたる国郡を主基と言いました。斎忌、主基にあたる国郡は占いによって決められました。そして天武天皇白鳳五年の斎忌にあてられたのが尾張国山田郡であり、その斎田が設けられたのが印場渋川の地であったと伝えられます。もともと印場の地名の由来もこのときの斎場から転化したのだそうですが斎田が設けられた渋川の地は、今渋川神社のあるところではなくて、もっと西南、大森から行けば千代田街道をまっすぐ東へ、東名高速道路につきあたったあたりで、大森とはつい目と鼻の先です。通称ソブコと言われるこの地で実った稲穂は西北方の大森東山ノ田の斎穂社に移され、ここで新穀を精選したとのことです。斎穂社はその後俗に伊保里塚とか



再建された斎穂社

疣塚とも言われ、一時は荒廃したこともあったらしいのですが、整地後は場所を変えてりっぱに再建されています。

この時代に行なわれたもう一つのできごとは大化二年（六四六）の改新の詔勅にある班田収授の法です。この法の目的によって当時日本各所で土地の再編成が行われました。すなわち条里制です。これは当時の田圃を東西南北六町ごとに条と里に区分したもので、この六町四方の里の中には三十六個の坪がありました。この坪は三六〇尺×三六尺、または一八〇尺×七二尺の広さがあったそうで、小幡にある大坪とか一の坪という地名はその名残りだそうです。条里制の「遺構」は庄中から大森、小幡へと見られたそうで、区画整理が行なわれる前は大森でも薮田、五反田のあたりにはっきり残っていたとのことです。

山田次郎重忠

前章の斎忌斎田のところで「尾張国山田郡」という日本書紀のことばが出てきました。旧春日井郡の庄内川以南、愛知郡の北部、すなわち今の名古屋市の北部、東部、長久手町などをふくめた地方を昔は山田郡と呼んでいたようです。わが大森ももちろん山田郡の中に入っていたわけです。奈良時代以降、このあたりは東大寺の荘園になったらしく、平安時代の中期の長徳年間（一〇〇〇年ごろ）東大寺の荘園は尾張一国だけで五百八十町歩もありました。人口がすくなく、したがって耕地もすくない当時にあっては実にたいへんなことです。そんなころ、どこの荘園でも、その荘園を管理する一族が、その地方の豪族としてのしあがってきました。尾張国山田郡でも同様でした。大森の八劔神社の由緒にも、延暦十二年（七九三）といいますから平安遷都の前年なのですが、当時この地に住んでいた山田の連という人が神社を建てたとのことです。

ところが寿永三年（一一八四）すなわち平家が檀ノ浦で亡びる前年に山田郡は八条院領となってしまいます。八条院というのは鳥羽天皇皇女暲子内親王のことで、山田郡は皇室の荘園になったわけです。当時この荘園を支配したのが山田次郎重忠という人で、八劔神社を建てた山田の連の子孫かも知れません。後に承久の乱が起こりますと、重忠は皇室領の荘司であった関係からか後鳥羽院に味方して鎌倉の北条方と戦いました。彼は勇敢に戦ったのですが、ついに敗れて京都で自殺したとのことです。小幡で生まれたと伝えられる重忠は、勇猛だが心情はやさしく、生前自分の父・母・兄のためそれぞれ長父寺、長母寺長兄寺を建てました。そのうち長父寺は早くすたれましたが、長兄寺は長慶寺と名を変え今も小幡にあります。長母寺は矢田にあり、これはあまりにも有名です。

大森城

尾州古城志という本に

大森城二ケ所、其城主不詳。

とあり、寛文覚書という文書に

古城跡弐ケ所、先年の城主不知、今ハ畑ニ成ル。

また尾張徇行記という本に

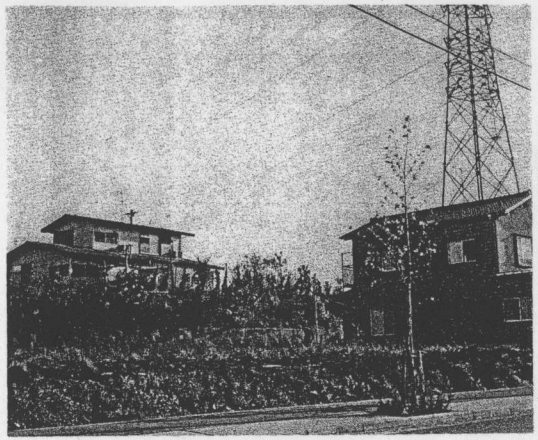
川南字番城、川北字田中城トイエリ。

とあります。これらの本は皆江戸時代に書かれたもので、いずれにしても城主は不明、城は矢田川をはさんで北と南に二か所あったことがわかります。城と言っても名古屋城のような城を想像するのは見当はずれです。中世の豪族屋敷のようなもので、周囲に浅い堀をめぐらし、土塀で囲ったぐらいのもの、石垣なんかはありませんでした。

さてこれから二つの城についてもっとくわしく調べてみましょう。まず川の北側の城ですが、城址は大森中学校の南方、大森住宅のすぐ北側のあたりについ最近まで存在していました。田中城と言われたごとく、田の中に一段と高く、広さは約三十メートル四方、三方に堀のあとがあり、堀は田となり、城地は畑となっていたそうです。区画整理で城址はつぶされましたが、「尾関が城」と呼んでいたと言う人もいました。法輪寺の縁起に

貞観二年（八六〇）此村の城主尾関勘八郎、はじめ天台宗の一庵を創建し……

とあります。貞観二年という年代はともかく、中世には尾関という一族が大森を支配し



今は鉄塔の下に――やなだが城址

ていたようでした。猪高村誌によると、「藤森城主小関三五郎」という人物が戦国時代に出てきます。血縁関係が両者の間にあったかも知れません。さて南北朝のころ志段味に水野良春という豪族が住んでいましたが、康安元年（一三六一）足利二代将軍義詮のころですが、良春は一族郎党を引きつれて志段味の南方にひろがる平地を開墾して住みつきました。新居という名がその土地につけられたのもそのためだそうです。さて良春四代の孫の水野宗国という人が新居に城を築きました。今の尾張旭市の長池の東南、洞光院の西の丘陵のあたりです。ところがそこへ大森城主の尾関氏が一族を率いて新居城を攻撃してきました。時代ははっきりしませんが、多分足利義政の時代、応仁の大乱があったころでしょう城の南西の八瀬ノ木のあたりで戦ったのですが、尾関方は敗れて退きました。勝った水野方ではつぎのような落首（狂歌）がもてはやされたそうです。

水野川瀬々の岩波はやければ
　尾関は落ちて行方もなし
　忘れても八瀬ノ木川の水呑な
　尾関がたれし糞ぞ流るる

あまり品のいい歌ではありませんが、さて翌日今度は水野宗国の方が大森へ攻め入り、大森城を包囲しました。城は焼けて尾関氏は亡んだものとみえます。その後大森は織田一族が優勢になるまで水野氏のものとなったのでした。

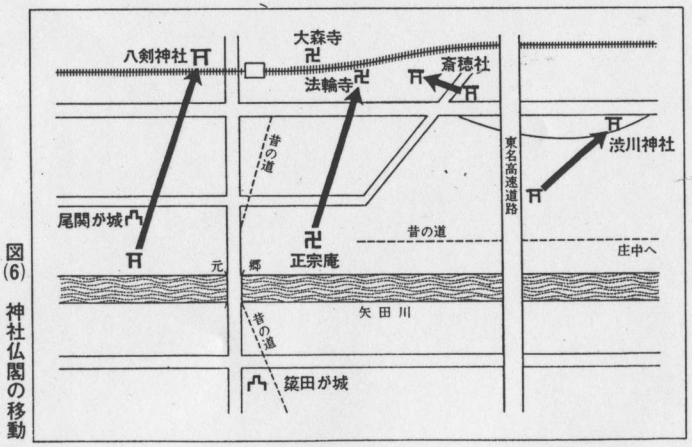
つぎに川の南にあった城址に話を移しましょう。東春日井郡誌に「米田城址」として、

大森地内矢田川の南凡そ二町程にあり。明治維新頃迄、堀の跡又は塀跡などありしかど今は耕され畑となり……

と書かれており、「俗にこれを『やなだが城』という」と結んでいます。城址は大森橋を渡って南東にのびる旧道が台地にかかる西側、今の下市場の交差点の南東の高台にある高圧線の鉄塔の東側のあたりです。区画整理前の地図で判断しますと、北と東はかなり急な崖で南側に堀らしきものが見えます。堀は最近まで竹やぶとなって残っていたそうです。さて城主はだれだったのでしょう。尾関が城が尾関のものならば、やなだが城は築田のものにちがいありません。長久手村誌に「戦国時代大森城主一万石築田出羽守」と書いてありますが、それ以上のことはどうもよくわかりません。尾関一族の墓は最近まで大森の「先生塚」にあったとのことですが、築田一族については全くわかりません。ただ城の下で日を決めて領民たちが物々交換をしたのでしょう。下市場の名はそこから来たと思われます

黄金伝説

法輪寺の山門をくぐると、境内の諸堂はすっかり新らしくなって、ややとまどいますが山門を入ったすぐ左側に三基の小さくて古い石塔が目につきます。中央の一基は五輪塔みたいで、左右の二基は宝筐印塔のようです。立札には佐藤継信・忠信兄弟とその母の供養塔と書いてあります。佐藤兄弟は陸奥国信夫郡（今の福島県）の豪族の息子で、奥州平泉から源義経に従って平家討伐に参加して手柄を立てましたが、兄継信は屋島の戦で戦死、弟忠信はのちに義経が兄頼朝に追われる身となったとき、やはり義経の身代りになって戦死しました。二人の子を失なった母は悲歎のあまり尼となり、二子の菩提のために京都のお寺を参拝する途中大森のこの寺に立ち寄ったのでした。前にもすこし述べましたが、法輪寺は、初め大森城主尾関勘八郎によって創建されましたが、当時の寺号は法輪寺ではなく正宗庵といい、場所も今の地ではなくて元郷の東端、今の守山警察署の近くにあったそうです。佐藤兄弟の母はそこへやって来たわけです。しばらく滞在するうちにこの母は庵主と相談して仏殿、方丈、山門などをりっぱに造りなおし、故郷から仏像もとり寄せて本尊とし、兄弟の位牌を作って安置し、わが子の冥福を祈って帰郷したとのことです。ところが帰郷するとき、せっかくりっぱになったこの寺も、将来おとろえて荒廃することもあるだろうと、黄金千枚を地下に埋め、その場所を書いたものを本尊の台座の中にひそかに入れておいたのでした。後年この文字が発見され、寺の修築のための資金にしようと謎の文を判読して、それに相当するところを掘ってみたそうですが、ついに黄金を見つけることはできませんでした。その後もたびたびこの黄金を発掘しようとする者が現われ、つい最近までこのような人がいてあちらこちらと掘ってみたそうですが、やはり黄金は出てきません。そこで黄金などはもともと無くて、



図(6)　神社仏閣の移動

佐藤兄弟とその母の供養塔

本堂落慶法要でにぎわう雨中の法輪寺

謎の文はにせなのだという疑いも出てきますしかし、佐藤一族は一説によると奥州藤原氏と血縁関係であったと伝えられますので、経済的には恵まれていたにちがいありません。だからこの黄金伝説もあながち作り話ではないでしょう。謎の文の読みちがえかも知れません。黄金一千枚は今のお金にしていくらになるかは知りませんが、黄金を掘り当てるために、謎の文をもう一度判読し直すこともおもしろいでしょう。謎の文はつぎのとおりです。

以後為造立金子千枚、此御寺牛刀二日置之也。　六月吉祥日

ただし黄金を掘るにあたって一つ注意することがあります。昔法輪寺があった跡は、最近まで村人の間で「死田」と呼ばれ、誰も耕作する人はいませんでした。もし耕作するとその本人や家族の中の誰かが必ず死ぬのだそうです。地下に埋められた黄金の魔力かも知れません。だからせっかくの黄金も掘った人が手にしたとたん、その人はあの世行きということになるかも知れません。

さてもう一つ、別のことですが、佐藤兄弟の母はどうして草深い大森（当時）にやって来たのでしょうか。大森の「檀ノ浦」を屋島の「檀ノ浦」とまちがえて来てしまったのだという説があります。平家は下関の「檀ノ浦」で亡びましたが、屋島にも「檀ノ浦」があります。平家にとっては縁起のよくない地名です。今の法輪寺のある裏のあたりも「檀ノ浦」といいますが、下関や屋島とちがって海はありませんので、大森のは津々浦々の「浦」ではなくて、多分「裏」のことでしょう。「檀林」と言えば寺のことですから、法輪寺が今の場所へ移転してからつけられた地名とも考えられないことはないのですが、「檀ノ浦」は「壇ノ浦」とも書くそうですから、「壇」ならばそれは「土を盛りあげて作った祭壇」または「高く構えた場所」を意味します。「壇」は「段」にも通じ、「段ノ上」という地名が長久手にもありますので、結局大森の「檀ノ浦」は「高く構えた場所の裏」と考えるべきです。いずれにしても佐藤兄弟の母のような教養人が、屋島と大森をとりちがえるようなことはありえず、古書にも「庵主是其支族」とありますから、要するに佐藤一族と正宗庵の庵主とは親戚であったわけです。

白山林の激戦

徳川家康・織田信雄（連合軍）←→羽柴秀吉

天正十二年（一五八四）旧歴四月九日の早朝、夜もまだ明けやらぬころ、時ならぬ人馬の足音に大森の村人たちは驚いてとび起きました。闇をすかして見ますと、大軍が東の方をさして進んで行くではありませんか。やがて夜も白みはじめたころ、はるか東南方ではげしい銃声がひびきわたりました。村人たちは取るものも取りあえず、安全な山の中に逃げ込みました。史上有名な長久手の合戦の火ぶたが切って落とされたのです。

すでにこの年の三月以来、小牧山のあたりで徳川家康・織田信雄の連合軍とにらみ合っていた羽柴秀吉は、家康の本拠岡崎を攻略したいという部将池田信輝の願いを入れて、総勢一万七千人を三隊に分け、先頭は池田信輝、森長可ら主力九千人、第二隊は堀秀政ら三千人、後尾には秀吉の甥で当時わずか十七才の三好秀次を大将として五千人、四月八日夜ひそかに岡崎に向かって出発させたのでした。その進路は第七図のとおりです。これを知った家康は信雄とともにこれもひそかに小牧山の本陣を出発、一万四千五百人の兵を率いて夜中に味方が守る小幡城に入り、ここで隊を二つに分けて自分は信雄とともに池田の本隊を突くべく、九千五百人の軍勢を指揮して矢田川の北岸沿いに東進しました。大森の人たちが驚いたのもこの時です。もう一隊五千人は小幡で矢田川を渡り、猪子石原から森孝新田へ出てここで隊を三つに分け、大須賀康高、岡部長盛らが率いる二千人は三軒家を通って四軒家のあたりまで進んで、三好秀次の軍の側面に接近し、榊原康政、本多康

重らに率いられた千八百人は大森の定納から庄中の東向畑に進んで秀次の軍の後尾に接近しました。残りの千二百人は予備軍として水野忠重、丹羽氏次の指揮の下に、両軍の中間に兵を進めました。

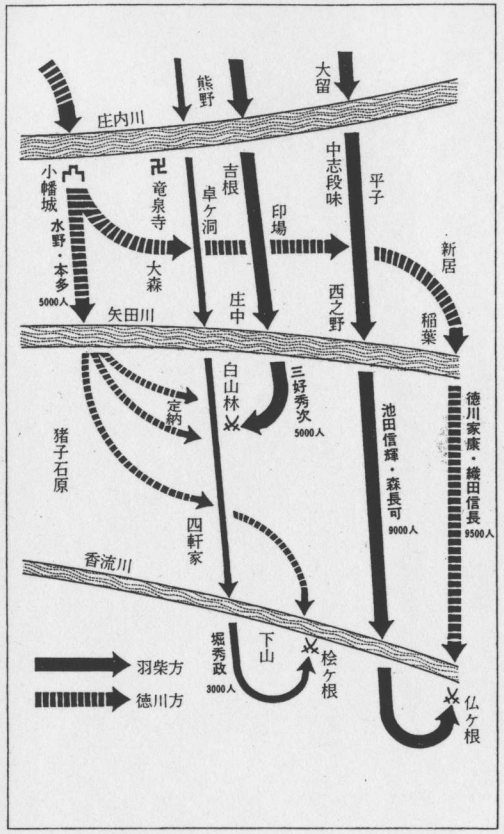
秀次の軍は庄中のあたりで矢田川を渡り四月九日午前五時ごろ、今の本地が丘団地の下のあたりで朝食をとるべく休憩していました。当時このあたりは白山林と呼ばれ広大な森林となっていたのですが、大須賀・岡部の徳川隊はそれにかくれて接近し、一斉射撃をあびせたからたまりません。不意の襲撃に驚いて右往左往する三好勢に二千人の徳川勢が突込んで来ました。三好勢は必死になって軍をたてなおし防戦に努めましたが、そこへ榊原・本多勢千八百人が背後より突進して来ました。前後に敵を受けて三好方は苦戦におちいり、秀次の本陣も危うくなりかけました。そこを水野・丹羽に率いられた徳川方の予備の一隊千二百人が横合いから突入して来たので、ついに三好勢は総くずれとなり、午前六時ごろ南方に向かって敗走しはじめました。秀次は徳川軍に追われて黒石のあたりで香流川を渡り、長湫の細ケ根（今の地下鉄藤が丘車庫東北方）で自軍を再びたてなおそうと試みましたが徳川方の鋭い追撃にあって失敗し自分の馬も敵弾に倒されてあわや討死となるところを、味方の部将木下勘解由利匡が自分の馬をさし出したので、それに乗って逃げやっと助かることができました。利匡は兄利直とともに追撃する徳川勢を相手にはげしく戦いましたが、ついに二人とも討死してしまいました。

勝ち誇った徳川勢は敵を追って岩作方面へ進み、堀秀政の軍に襲いかかりました。知将である秀政は香流川の南岸桧ケ根で敵を引きつけ、一斉射撃をあびせたので今度は徳川方が敗走する番になってしまいました。岩作南方で主力の池田軍と戦おうとしていた家康は、前後に敵を受けて苦戦になることを恐れ、味方にときの声をあげさせて秀政の軍をおどしました。これを見た秀政は家康の本隊が近くまで来ているのを知り、「これ以上戦えば自分の方が負ける。義務は果たした」と自分の軍をまとめてさっさと帰って行きました。そこで家康は思う存分池田軍と戦うことができました。結果はみなさんがご存知のとおりです。

大森の受難

白山林の敗報が楽田の秀吉の本陣に達したのはその日の午前十時ごろでした。秀吉は大いに驚きすぐ諸将に命じて二万人の大軍を引率して正午ごろ出発しました。途中池田信輝、森長可の戦死の報に接し、秀吉は腹を立てながら午後四時ごろようやく竜泉寺に着きました。その間家康は午後二時ごろ勝利をおさめて帰途につき矢田川の南岸を通って小幡で矢田川を渡り四時半ごろ小幡城に入りました。竜泉寺に着いた秀吉は直ちに先発隊を長久手に向けて出発させましたが、かれらが大森まで来ると徳川の本隊はすでに引きあげたあとで、おくれた徳川の兵士たちが二百人ばかりかれらに見つかって首をはねられました。秀吉は家康が小幡城にいることを知り、すぐ小幡城を攻撃しようとしましたが、諸将に「明朝まで待った方がよろしい。」と言われて思いとどまりました。一方家康は部将に秀吉がいる竜泉寺を夜襲したらと言われたのを退け夜の八時半ごろひそかに小幡城を退き、小牧山に帰ってしまいました。翌日これを知った秀吉は仕方なくやはり自分の本営へ帰って行きました。竜泉寺は火を放たれて炎上しました。

家康は幸運でした。もう一時間長久手から引上げるのがおくれたら、あるいは秀吉がもう一時間早く竜泉寺へ来ておれば、両軍は大森のあたりで激突したはずです。戦で疲れていた徳川軍に勝目はなく、そうなっていれば後の徳川の天下もなかったでしょう。そしてそれは大森の人々にも幸運でした。大森で決戦が行なわれたら人々はもっとひどい目に会ったことでしょう。しかし大森は他の村々と同じく荒らされました。法輪寺（そのころは正法寺）は炎上し、記録はありませんが、民家もほとんど焼かれたことでしょう。敵に利用される恐れのあるものはすべて焼いてしまうのが戦争の定石でした。だから羽柴方も徳川方もそれをしたのです。印場の良福寺、猪子石の月心寺などもその時焼失しました。大森の田や畑のあちこちには首のない兵士の死体がころがっていました。村の人たちはそれらの兵士をていねいに葬りました。あちらこちらに塚ができましたが、それらは最近まで田の中に残されていたということです。



図(7)　長久手合戦経路図

歓喜院乾の御方

大森寺の本堂の裏へまわると、「歓喜院殿花林紅春大姉」というりっぱな墓塔が建てられています。歓喜院は、尾張徳川二代藩主光友の生母で通称乾の御方と呼ばれ、寛永十一年(一六三四)江戸で亡くなりました。その時光友はまだ九才でしたが、後に藩主になるに及んで、生母の故郷である大森村に大森寺を建て、江戸から墓も移して手厚く葬りました。歓喜院の出生について「尾州知多郡産吉田氏女」とも書かれておりますが、これは故郷を大森とする説と矛盾しますので、この点をもうすこし調べてみましょう。

それにはまず光友の父である藩祖義直に触れなければなりません。義直は家康の第九子で晩年の子でしたが、文武兼備のすぐれた性格でしたので、家康にたいへん可愛がられ、慶長十二年(一六〇七)尾張六十一万石の藩主になった時はまだ十三才でした。若い義直は学問に精を出し、武術もよくし、よく狩にも出かけました。義直がよく狩をしたのは「水野山」でこれは今の森林公園一帯でした。

大森寺にある「乾の御方」の墓所

藩主になって数年後のある日、水野山での狩の帰途義直が大森村を通りかかると、一軒の農家の庭先で一人の娘が臼で麦をついているのを見かけました。藩主一行を見て驚いた娘は麦が入ったままの重い臼をかかえて家の中に入れ父親がたらいで行水をしていたのを見て、父をたらいに入れたまま家の中へ運び込んだそうです。これを見て義直は、「このような力持ちの娘を妻としたならばきっとりっぱなあとつぎの子を生んでくれるだろう。」と言ったそうです。そしてその娘が後の歓喜院乾の方なのだそうです。この話は話としてはおもしろいのですが、事実かどうかはわかりません。乾の方の本名はお慰といい、「おじょう」または「おしょう」と呼ばれたそうです。尾張徇行記という書物に、「歓喜院様御父ハ大森村百姓ニテ庄助ト云……」とありますから、故郷が大森であることは事実のようです。そしてまた同じ本に、「光友公ハ敬公御湯殿カ、リ於シヤウ殿ト申軽女中ノ御腹ヨリ御誕生ナリ」とあります。敬公とは義直のことです。身分制度がきびしい当時のことですから、お慰は吉田家の養女という身分で奉公に上がったのでしょう。お慰はいわゆる玉の輿に乗ったわけですが、決して今で言うシンデレラのような可愛い子ちゃんではありませんでした。「容貌ハアシキ由」とはっきり書いてあります。しかしいつの時代でもそうですが、人間を生まれと容貌で判断することはまちがっています。事実義直の眼に狂いはありませんでした。光友は九才で将軍家光の御前に出ましたが、挙措進退礼にかない、居並ぶ諸候を感心させました。後に家光の娘千代姫と結婚しましたが、この姫は家光の一人娘で将軍家にとっては何物にもかえがたい大事な姫であったそうで、これは光友の器量がいかに優れていたかを示す証拠なのです。光友は英邁剛毅、武芸、書画にも巧みで内外の信望極めて厚く、徳川親藩中の柱石として尊敬されました。このような光友の人となりは、父義直が優れた人であっただけでなく、母乾の御方もりっぱな婦人だったからではないでしょうか。乾の御方は早く亡くなりましたが、光友は母の恩を忘れず、大森寺に三百石の寺領を寄付して

たやすなよ大森寺の鐘の声
たとへこの世は変りゆくとも

と詠んで母の冥福を祈りました。歓喜院乾の御方こそはわが大森が誇っていい人だと思います。

今の大森寺の庫裏の東方には明治の初期まで光友が建てたりっぱな常念仏堂がありました。江戸時代にはそこで毎日乾の方のために法要が営まれたということです。

江戸時代のくらし

矢田川のはんらんと農家の貧困

元郷（もとごう）

大森駅の北西の山の上に八𧏾（やつる）神社があります。大森の氏神です。境内はよく整備されていますが由緒を読みますと、昭和二年にここに移転したと書いてあります。東春日井郡誌にはこの神社の所在地を

大森字中ノ町田六六九番地

と書いてあります。大正六年の地図（P4第一図）を見てみましょう。大森橋の西約二百五十メートルに神社の記号があります。ここが大正時代までの八𧏾神社です。そしてそのすぐ北五十メートルぐらいのところにあたりの水田よりやや高くなっている場所がいわゆる「尾関が城」でしょう。大森橋の北詰のあたりを元郷と呼びます。昔大森の村があった所です。元郷の東部の天神川に近い所に法輪寺の前身正法寺がありました。元郷は西に神社と城、東に寺があり、道は川沿いに東へのびて庄中へと続いていたそうです。（P6第六図参照）

江戸時代の初期に元郷の集落は山ぞいの今の地に移りました。城はすでに城址だけになっていました。寛文二年（一六六二）寺も今の地に移されました。その前年には大森寺が今の場所に建立されています。ただ神社だけがそのまま昭和まで旧地に残されていたわけです。昭和になって神社が移転された理由を古老に聞きますと、出水があるたびに境内が水びたしになったからだそうです。つまりそのあたりは矢田川に近い低湿の地であったのです。これを聞いて、なぜ部落が元郷の地から今の場所へ移転したのかわかった気がしました。元郷の場所では絶えず洪水の危険にさらされ、また実際よく洪水の被害を受けたものと思われます。しかしそれならばなぜ最初からもっと安全な場所に居住しなかったのかという疑問が出てきます。これからその点についてすこし考えてみましょう。

古代では人口も少なく、矢田川流域は大部分原始林で土地の保水力も大きく、あまり洪水の危険はなかったと思われます。それに農業技術も幼稚で、雨池（雨水をためるのでその名がある）などに見られるような用水池もなく、自然の水をたよりにする外なく、したがって今の瀬戸街道あたりは、今では平地のように見えますが、昔は緩傾斜の山林で、せいぜい畑ぐらいしかできなかったと思われます。ですから水の便がよく、しかも耕地に近い元郷の地が住居に選ばれたのでしょう。それに矢田川の河道も今のようになったのは、明和四年（一七六七）の大洪水以来だと伝えられます。それ以前の河道がどのようであったか、はっきりしませんが、今の大森住宅がある地を欠ノ下（かの）といいますが、この地名の由来は崖の下、すなわち対岸の猪子石原の台地の崖の下という意味です。今地図の上で猪子石原の崖の線から矢田川のまん中までの距離を計ってみますと、約三百メートルから四百メートルあります。崖の下にしてはちよっと遠く離れ過ぎている感じです。もちろんたび重なる洪水によって崖の線が後退することもあったでしょうが、矢田川はもっと南方を流れ、欠ノ下の土地も、もっと南方まであり、川の対岸はすぐ猪子石原の崖であったのではないでしょうか。そうすれば欠ノ下の地名が生きてきます。そして矢田川は元郷のあたりでも、もっと南方を流れていて、水害の危険もそれだけ少なかったわけです。ところがだんだん人口が増加して山林は開かれて耕地になりました。土地に保水力がなくなって、降雨のあとはきまってどっと水が出るようになりました。それに拍車をかけたのが瀬戸の窯業です。瀬戸の窯業の歴史はかなり古く、すでに平安時代の延喜五年（九〇五）の記録には毎年尾張国より陶器が献上されたと伝えています。下って鎌倉・室町時代になると、瀬戸はますます栄え、燃料として山林の松をつぎつぎと伐採したため、土砂の流出がはげしくなり、下流の矢田川は場所によっては天井川の様相を示す所もでてきました。農業技術も進んで山寄りの土地も開墾が進み、水害を避けるためにも元郷からの移転は必要でした江戸時代にはずいぶん何回かの洪水が記録されていますが、とくに明和四年のそれは、矢田川の源流である猿投山を中心とした広範囲にわたる集中豪雨であったらしく、赤津雲興寺の門前を流れる巾六メートルほどの小川が四倍に広がり、おびただしい巨石が押出して田畑を埋め、下流の山口村では小さな渓流であった山口川が大川となり、川沿いの民家はその時より山のふもとへ移転しました。大森の下流でも濁流が矢田の長母寺の裏山を押流し、それまで寺の南方を流れていた矢田川の河道が寺の北方を通るようになってしまいました。尾張徇行記にも大森村の項で、

山口川（矢田川）ハ村南ノ方ニテ東西ニ流レワタレリ。川ノ左右ハ漸々（ぜんぜん）決壊シテ砂入年数引多ク、砂地ユヘ只（ただ）小麦ナト多ク作レリ。

と記録されています。

新田開発

時代とともに人口が増し、各地が開墾されて耕地も増加しました。この章ではそのいきさつをたどってみましょう。

はじめのうちは矢田川の水は利用されませんでした。矢田川は村の最も低い所を流れているので、当時の技術としてはそれを高い場所へ導くのは不可能でした。ため池などはもちろんありませんから、頼ることができたのは天然のわき水でした。大森の丘陵地に降った雨は地中にしみこみ、やがて泉となって山のふもとで出てきました。今の瀬戸街道の少し南方にはそんなわき水があちこちにあったと思われます。学区の西端の「大清水」などはさしあたってそんな場所でした。印場に「越水」がありますが、これは「小清水」のことでしょう。（P5第三図参照）「白晴（しらはる）」のあた

りにもマス池とかいう清水のわく池が最近まであったそうです。これらのわき水を利用してその下流に田が開かれました。大森には開墾を示す地名がたくさんあります。まず東端の東名高速道路の近くに「階所」がありますこれは「開所」のことで、文字はちがっても全国各地にあります。瀬戸の東、猿投山の中腹には「海上」と書いて「カイショ」と読ませる所もあります。「五反田」や「六反田」はどうでしょうか。柳田国男氏によると、これは開墾した土地を農家一戸あたり五反歩または六反歩ずつ分配した区域のことで、「五反田」には田が五反歩しかないのではけっしてありません。ほかに開墾を示す地名として「附田」と「白晴」があります。「白晴」の「白」は多分「代」のことで田を意味します「ハリ」は高針や平針の「ハリ」と同じで、古事記に日本武尊の歌として、

新墾　筑波を過ぎて　幾夜か寝つる

とあるように開墾地のことです。「薮田」も昔薮を開墾してできた田のことでしょう。

つぎに矢田川の南に目を向けましょう。「野田」は「ヌタ」から転化したと言われます。「ヌタ」とは湿地のことで、昔の矢田川の河道を考えると、このあたりが低湿地であったことは確かです。志段味の対岸にも「野田」という所がありますが、地図で見るとやはり低湿地のようです。つぎは「天子田」ですがこれは「アマコダ」ではなく、正しくは「アマゴダ」だそうです。由来はわかりませんが祭祀に関係があると尾張旭市史には書いてあります。雨乞いに関係があるかも知れませんさてその南側は台地となって水田を作ることはできず、山林を開墾して畑とするより仕方がありませんでした。だから分家した農民の家も林野の中にあり、「山屋敷」と呼ばれました。やはり「徇行記」につぎの記述があります。

向山トイヘル所ハ山口川ノ南山ヨリニアリ。農家十六戸ホトアリ。其内十一戸ハ寛保三年見取所へ移リ、五戸ハ明和五年定納山へ引移レリ。

見取所とは未検地の土地のことで、この場合、具体的にどこのことかよくわかりませんが、多分「山屋敷」の周辺でしょう。定納山とは今の「定納」のことで、明和五年といえば例の大水害の翌年です。「下市場」あたりの山すそに住んでいた人たちが、水害のために南方の台地の上に移り住んだのでしょう。

「定納」とは「定納田」または「定納山」のことで、「定免」ともいい、愛知県には特に多い地名だそうです。年の豊凶によらず、毎年一定額の年貢を納めさせる土地のことで、その税率は過去数年の収獲高の平均をとって決められました。この制度は年貢を取る藩の立場からすれば、毎年農作物のでき工合を見て年貢高を決める手間が省けていいのですが農民の立場からすれば、豊作の年はまだしも凶作が続くとその負担はたいへんなものでした。凶作だからといって、年貢はまけてもらえないのが定納の掟だったのです。

定納山六町五段六畝六歩
米一石四斗九升二合

右は当時の記録による定納山の耕地面積と年貢高です。当時の定納山は多分畑ばかりで田はなかったことでしょう。畑作物の年貢は米に換算してつぎのようになっていました。

麦一石＝米五斗
大豆一石＝米八斗
ひえ一石＝米三斗

すなわち、麦で年貢を出すとすれば、定納山に畑を持つ農家は二石九斗八升四合の年貢を出さねばなりませんでした。農民の生活の苦しさがよくわかります。

なお小幡に「存命」という地名がありますが、これはやはり「定免」のことで「定納」と同じ意味です。

森孝新田の古道

名古屋の城下から東へ、出来町へ出て茶屋ケ坂を通り、猪子石を東へ抜ける道を昔は「山口街道」と呼んでいました。この街道は今の猪子石原のバス停の東で二つに分れ、山口街道は左へ入ります。右へ行く道は「岩作道」といって、四軒家から長久手方面へと続いていました。（P6第四図参照）今の三軒家のバス停のところは、大森方面から来た道と十字に交差していました。この道を南へ行くとすぐ香流川につきあたり、そこには寛政二年（一七九〇）にかけられた上香流橋がありました。ここを渡ると道は藤森、高針、平針、鳴海方面へ通じ、人通りもかなり多かったそうです。今はすこし上流に藤森橋がかけられたため、この橋はなくなりました。さて三軒家から東は、道はうっそうとした松林の中を通っていました。「隼人林」といって、尾張藩の家老、犬山城主の成瀬隼人正の所領でした。文政五年（一八二二）ここを通った露竹斉宇朗という文人は、「古松左右におひ茂りて淋し」と記しています。人家はほとんどなかったようです。

一方山口街道をたどってみますと、猪子石原で分れた道は狭くて昔のままです。新引山の市営住宅を通り過ぎるとわが学区に入ります。道は森孝新田と大森の六ケ塚、定納、山屋敷、向野田との境界を通っています。途中南側の角に、美しい三十三体の石の観音像が祭られています。これは西国三十三ケ所巡拝の供養のために建てられたもので、この風習は江戸後期には一般化したそうです。現にこの観音像の一体に「寛政八年」という字が見えます。一七九六年のことです。当時熊野

森孝新田の三十三観音

那智の青岸渡寺から美濃の谷汲山まで三十三ケ所を巡拝すると、最低五十日はかかったそうで、まさに命がけの旅でしたが強い信仰心がそれを支えたのでしょう。今も献花がたえませんが大事にしたいみ仏たちです。

さてそこから少し東へ、人家もなくなって東名高速道路が見える左手の角に馬頭観音らしい一体の石像が立っています。近くでよく見ると「右せと、左のふらい、天保十一年」と読めます。この像は区画整理前は、今の位置より少し東の分れ道の大きな椿の木の下にあったそうです。「のふらい」とは庄中にある直会神社のことで、よく信仰されました。山口街道はこの先、尾張旭の稲葉を通って瀬戸に通じていました。瀬戸街道を通って大曽根から名古屋へ行くより近いので、この道はよく利用され、馬に荷物を積んで物資を運ぶ人々がよく通りました。馬頭観音はそんな人たちの信仰の対象でした。

森孝新田の開発

「……新田」と名がつく所は、すべて江戸時代になってから成立しました。大森では西の方に弁天洞のため池を利用した「西新田」があります。東の方の新田は「東山ノ田」と呼ばれていますが、これは雨池から用水を取っていました。しかしこれらの新田は独立した村になるほど大規模ではありませんでしたしかし森孝新田はたとえ一時的にしろ、一つの村となったのですから事情が違います。森孝新田の開発の過程については、資料が乏しく不明の点が多いのですが、できるかぎり明らかにしてみたいと思います。

前頁で書いたように、大森向には十六戸の農家があり、寛保三年（一七四三）と明和五年（一七六八）に南方の山に移っています。そんなころ山口街道までのいわゆる大森向の山林が開発されたと推定されます。それより南のいわゆる森孝新田にいつごろ人が住むようになったかが問題となるところです。これを判断する資料が今のところ三つあります。

古い順に並べると、

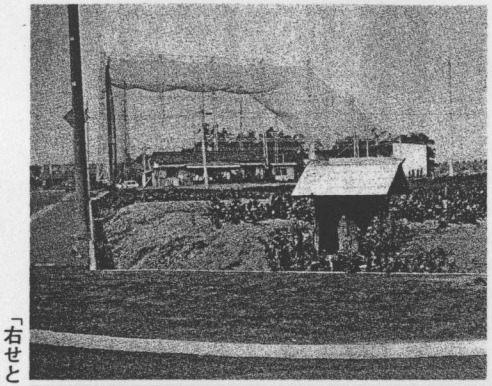
一、森孝新田の肥後守平氏宅の蔵の鍵に、天明五年（一七八五）と記入されている

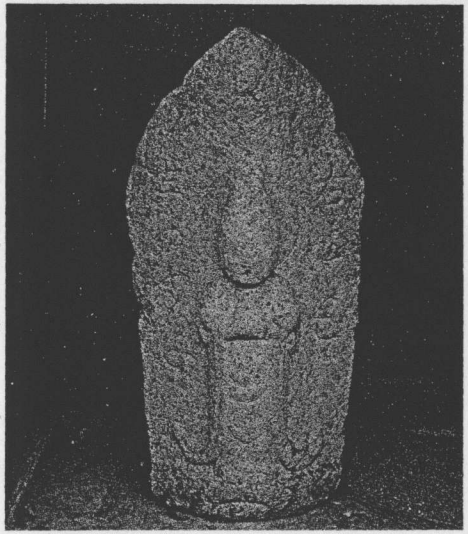
二、前述しましたが三十三観音像の一体に寛政八年（一七九六）の銘がある。

三、森孝新田の八剱神社の由緒について、東春日井郡誌には「文政九年丙戌（一八二六）五月二十六日勧請の由」と記録されている。

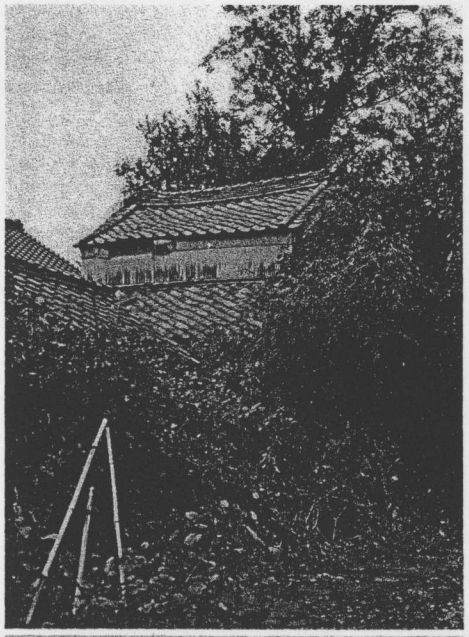
以上から判断すると、森孝新田に人家ができたのは、一七六〇年ぐらいから一七八〇年のころと推定できます。しかし開発は進まず人口はあまり増加しませんでした。明治七年（一八七四）になっても森孝新田の総戸数は二十八戸、人口は二百十九人でした。その年大森では二百七十九戸、千百二十人ですから一個の村としてはあまりにも格差があり過ぎます。もちろん森孝地区はその大部分が台地ですから、四軒家の方は別として水田はできません。大森から移ったと思われる農家の耕地の大部分が今でも野田とか天子田にあることは注目してもいいでしょう。開発を妨げる何かがあったと思われます。つぎにその点を考えたいと思います。

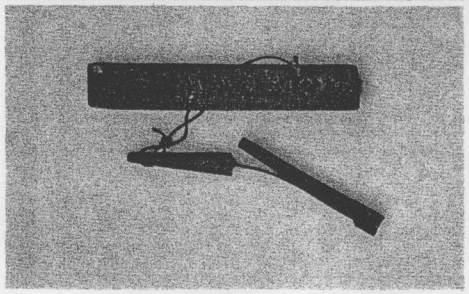
森孝新田の小字名は他の地域とくらべて大きな特色があります。すなわち西からおおよそ「甲、乙、丙、丁、戊、己、白山」です。ふつう地名はその地域の自然的特色とか、歴史的なできごとなどをとらえてつけられるも





「右せと・左のふらい」の道標の祠（上）と道標の刻まれた歓音像（下）





肥後守平氏宅の蔵（上）と「天明五年」の刻印のある蔵の鍵（下）

のです。森孝の場合、昔山頂に白山神社が祭られていたことに由来する「白山」を除き、甲から己までは単なる記号に過ぎません。甲乙丙は今の若い人にはあまりなじみがないのですが、戦前はこれで学校の成績がつけられ一喜一憂したものです。今でいえば「1・2・3」か「A・B・C」と同じです。甲乙丙の地名は森孝地区の歴史が浅いことを示しますが、このほかにもう一つ知っておくべきことがあります。

当時の農民の生活にとって、山林の存在は絶対に必要なものでした。今のようにガスや石油はありませんから、炊事や入浴のための燃料を山林から得なければなりません。また化学肥料もありませんでしたので、山林の下草を刈ってそれを肥料にしました。またその下草は牛や馬などの家畜の飼料にもなりました。牛や馬は農耕や運搬に使うだけでなく、その排泄物はよい肥料として利用されました大森のまわりには広い山林がありましたが、農民たちはそれらを勝手に利用することはできませんでした。たとえば大森の北方の山は吉根、志段味、印場、新居にかけて、実に五百五十五町歩という広大な「御林山」がありました。「御林」というのは藩有林のことで、農民は原則としてその中に立入ることはできず、「枯枝一本トイヘドモ」勝手に取ることはできませんでした。違反すればもちろん厳罰で、時には農民の首が飛ぶこともありました。藩の許可を得れば入山を許されて下草などを刈らせてくれましたが、その場合も下刈年貢を出さなければなりませんでした。御林山は森孝地区にもあり、「寛文覚書」にはつぎの記録があります。

一、白山御林山弐拾三町　印場、稲葉、大森三ケ村立合。

一、御林山七拾九町　稲葉、印場、猪子石、大森　四ケ村立合。

文政年間（一八二〇ごろ）には白山御林は二十九町歩に増加していますが、七十九町歩の御林はなくなっています。恐らくその大部分は犬山の成瀬家の所領として引き継がれたのでしょう。成瀬家はその一部を茶畑などにしていたようですが、とにかく農民たちが自由に開墾できる土地はあまりなかったのではないでしょうか。

明治六年（一八七三）に政府が実施した地租改正は、全国の農民に強い打撃を与えました。その骨子をここに掲げますと、

一、土地一筆ごとに地価を決める。

二、土地所有者に一筆ごとの地券を交付する。

三、地租は地価の三パーセントとする。

四、地租は土地所有者が全納するものとする。

この法は画一的に実施されたため、単なる増税にとどまらず、地域によってずいぶん不公平なものとなりました。特に森孝新田では耕地の地租が一躍七・四一倍になり、農家の苦しさは想像を絶するものでした。そしてこのころ、森孝地区の大部分の土地を、どのようないきさつかは知りませんが、海部郡の加藤久平という人が買い占め、八劔神社の東に年貢徴集のための屋敷を構えたそうです。収獲にくらべて年貢が高く、そのため森孝新田から引越してしまった人もあったそうです。明治の中ごろに、この土地の大部分を五千円で買ったのが、名古屋の円頓寺の近くに住む斉田庄右衛門という商人で、息子の藤吉氏が戦後坪三十円ぐらいで手離すまで、森孝地区の土地の大部分はこのように一人の地主によって所有されました。

以上のようないきさつと、台地のため水田耕作ができないこともあって、この地区の農家の耕地の多くは今でも野田や天子田方面にあるのです。昔の矢田川の河原は広く、天子田小学校の敷地もその中にあったそうですが明治以後堤防を整備して川幅を縮め、その分だけ耕地を拡張するという努力もなされました。その結果森孝地区を含めた旧大森村の耕地はつぎのように増加し、その広さも収獲高も今の守山区に属する村々ではトップの成績になりました。

江戸初期　八八・二町歩

明治初期　一二七・四町歩

森孝新田についてもう一つ付け加えることがあります。わが大森中学の学区を地図で眺めた時、四軒家から白山にかけて学区が魚の尾のようにのびて、ずいぶん不自然な形をしているのに気がつくでしょう。この原因を歴史的にみると、さしあたって考えられるのは先ほどあげた「白山御林二十三町歩」の項です。そこには「印場、稲葉、大森三ケ村立合」とありますが、これは白山御林については、三村で責任を持つということです。印場（庄中も含む）や稲葉は白山に近いのでわかりますが、遠い大森がどうして白山に関係しなければならなかったのでしょうか。これはまたあとでも述べますが、矢田川の水を利用する場合、この地区は大森にとっても大事な水源地帯であったからです。明治になって白山地区は三村に分けられ、その西部が大森村に編入されたわけです。以上のような由来のために、この地区の中学生は尾張旭市の中を通って通学しなければならないのです。

農民の生活

「村立ハ大体ヨキ所ニテ百姓構ニ竹本ハナシ、元ヨリ農業ヲ以テ生産トセリ、其内ニ富家モ二、三戸アリテ酒屋味噌屋ヲシ、又小商ヒヲスル者モアリ、其余細民共ハ赤津瀬戸村ノ陶器ヲ駄賃著ヲシ、又当村ニテハ草鞋ヲヨクツクリ名古屋ヘ多数売出セリ、是ヲ大森草鞋ト云フ」

「徇行記」の大森村の項です。勤勉で活発な村のようすがよく記されています。他の村はどうかというと、

守山村「村立アシク貧村ナリ」

大永寺村「今ハ貧村ニテ」

小幡村「北ヘ入リテハ皆小百姓バカリナリ」

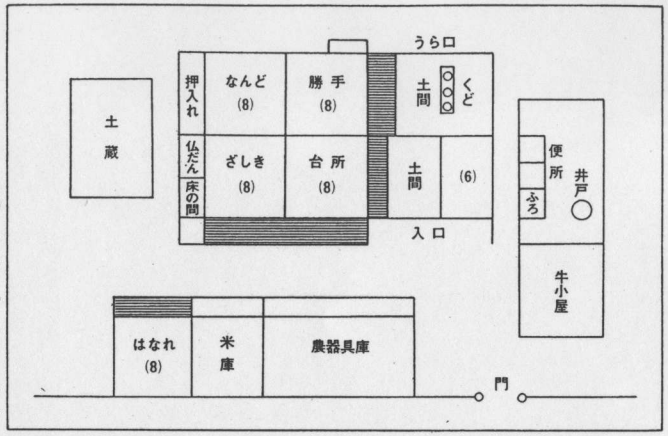
という調子でまことにきびしい記述ですが大森は近所の村にくらべて豊かであったことがわかります。大森の草鞋はよほど有名だったとみえ、印場で作る草鞋も「大森草鞋トイフ」と記していますから、どこでとれても「浅草のり」みたいで名物のようでした。

しかし江戸時代は藩による年貢の取り立てがきびしく、農民でありながら米の飯が食べ

られないのが普通でした。幕府は年貢米一俵を三斗七升と公定していましたが、いろいろな付加米がつき、年貢を名古屋城下の倉庫まで運搬し、検査を受ける費用まで農民の負担でした。運搬の目減りとして一石につき四升検査の費用として一俵につき一升を取られ、しかも米は最上質のものでないと受付けてもらえず、いろいろな土木工事や助郷に無賃で狩り出され、特に藩主が水野山へ狩に来た時など、近郷から数千人の農民が勢子として召集されたそうです。正保二年（一六四五）の狩では鹿三十七頭、猪十二頭、山犬二頭の獲物がありましたが、農民にはもちろん分け前はなしでした。女子には機織の有無にかかわらず綿布役という税を取られ、堤防の枯草にも税がかかり、竹やぶがあれば御竹役という税がかかりました。

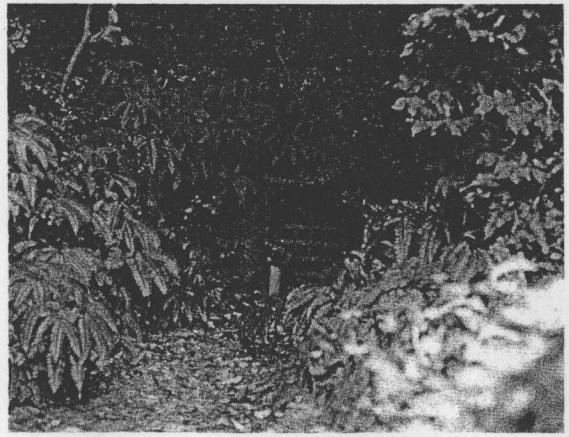
一、竹役五十本結二束半

と徇行記の大森の項にあります。山林もほとんど藩に押えられて、村民は燃料の不足で一週間に一度ぐらいしか風呂に入れませんでした。



図(8) 酒井平吉氏宅の見取図

分水嶺にある龍神社（雨乞い神社）



八剣神社東中腹にある弁天洞

住居も大正時代の記録によりますと、四八といって八畳間が四つある家はすくなく、普通の農家で土間は別として、八、六、六、四畳半の間取りでした。中には家を一周して八間、すなわち八畳一間だけの家もあったそうです。天井はなく、床もなくて土間に藁を敷いただけの家が明治時代までは数多くあったそうです。大森の酒井平吉氏宅は明治三十七年の日露戦争時代の建築ですが、当時としては数少ないと言われた四八の間取りです。（第八図参照）改築されて古い民家がなくなりつつある現今では、酒井氏宅は貴重な存在と言えましょう。

用水の話

農を本業とする大森村の人々にとって、恐ろしいのは洪水と干害でした。水は多すぎても少なすぎてもいけませんでした。金城大学の裏の分水嶺に龍神社が祭られ、弁天洞にも弁財天が鎮座されているのも、村人が水に対して深い関心を持っていた証拠です。農家の人たちは水を得るために、ため池、用水路などいろいろと工夫しました。そして農地をどんどん拡げていったのです。農業技術の進歩で矢田川の水の利用も可能になりました。大森の矢田川右岸（北側）では宮崎用水が利用されています。この用水の取り入れ口は、白山のふもと稲葉にあり、印場庄中を通って大森に入り、六反田の天神川と矢田川の合流点まで来ていました。矢田川左岸には野田用水があり、庄中向から大森の野田、天子田へと水が流されました。天神川には舟橋用水があり、印場の舟橋で取水されたのち、大森の方へ流されました。これらの用水路については いつも上流の村が権利を持ち、宮崎用水についていえば、印場は稲葉に用水使用料として毎年米七斗を支払い、大森は印場へ同じく米一石三斗七升六合一勺を支払うという約束になっていました。このように、いろいろと細かいとりきめがあったようです。しかし、雨が多い年はいいのですが、晴天が続いて水が不足してくると、めんどうな問題が起こりました。舟橋用水については寛政六年（一七九四）に、野田用水については文化二年（一八〇五）から五年にかけて、隣の印場といざこざを起こしています。詳細ははぶきますが、結局はけんか別れになったようです。記録はありませんが、下流の小幡とも同じようなことがあったと推察されます。

幕末から明治へ

寺子屋→学校・飛脚→駅逓

文明開化

江戸時代の寺子屋のようすははっきりしませんが、東春日井郡誌によれば、幕末慶応のころ、高木重利、臼井卯七郎という人が、大森の自宅で十人ばかりの子どもを教えていたそうです。維新のころ法輪寺境内の衆寮堂で生徒二十五人ばかりの寺子屋が開かれていました。教師は当時の第十一世住職の加藤默乗師（明治十七年没）と後の十五世住職加藤默翁師（明治二十九年没）でした。当時の寺子屋では一般的に授業料は年一両（米一石）手習いが主で一日に線香五本を使い、一本が燃えつきると休憩になったそうです。

明治六年になってやはり衆寮堂ではじめて小学校が開設され「三林学校」という校名だったそうで、先生一人、生徒男子四十六名、女子十名、修業年限は四年間でした。男女の比率がアンバランスですが、女の子はあまり来なかったのでしょう。学校の費用も住民の負担で、授業料として月三銭から二十五銭徴集している所が多かったそうです。そのようなわけで家が貧しくて学校に来ない子どもも多かったらしく、明治四十二年ごろ修業年限が四年から六年になりましたが、この年大森尋常小学校に入学した森孝新田の肥後時一氏の話によりますと、六年後に卒業したのは入学者の約半数で、家で農業を手伝ったり、子守りをしたりして、学校へ来ない子どもがずいぶん多かったという話です。義務教育とはいえ、明治の末になってもこのとおりで、今日から見るとまるでうそのようです。

大森郵便局

「大森郵便局は明治九年三月十二日に開局され、守山市ではもっとも古い。」と書いてあるのを見て、早速大森郵便局に臼井局長を訪ねました。見せていただいた古い沿革史によると、初代局長星野佐吉、二代梅本儀右エ門（明治十三年）三代臼井作次郎（明治二十四年）とあり、この作次郎氏が現局長の曽祖父にあたり、場所も今の所になりましたが、局舎はわずか三坪の広さしかなかったそうです

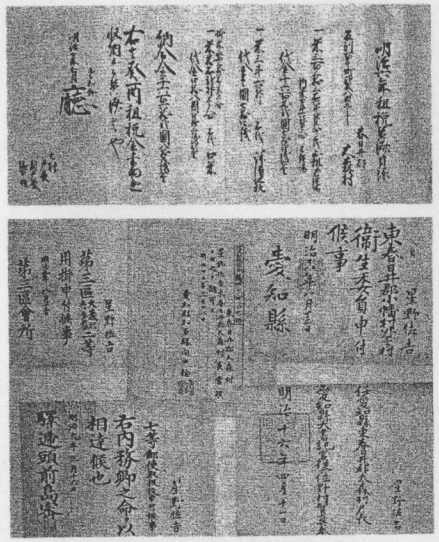
大森局がもっとも早く開局された理由について、沿革史ではつぎのように理由を述べています。すなわち、大森村は名古屋と瀬戸の中間にあたり、江戸時代から街道の人馬の継ぎ立てが行なわれ、交通の中継点であった上に、たばこ工場が二か所もでき、旅館、薬局などもあって、このあたりの中心地であったと説明しています。明治初期の大森のにぎわいが目に浮ぶようです。

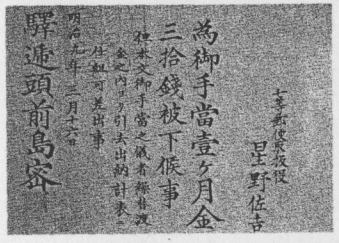
さてその当時の郵便配達夫は、毎朝八時十五分に郵便物を交換すると、一方は名古屋にもう一方は木瀬（藤岡村）に向かって、まんじゅ笠にはっぴ姿で郵便物を天びん棒でかつぎ一目散に走ったそうです。輸送は間もなく大八車にかわりましたが、途中強盗に会うことも多かったらしく、明治七年十月付で当時の駅逓頭（今の郵政大臣）前島密による、「駅夫の心得」が出ています。それによりますと郵便物継ぎ立ての途中盗賊に会った場合、

一、できるだけ速かにその場を逃れること

二、それが不可能な場合は、郵便物は信書ばかりで金銭は入っていないということを、賊によく説得すること。

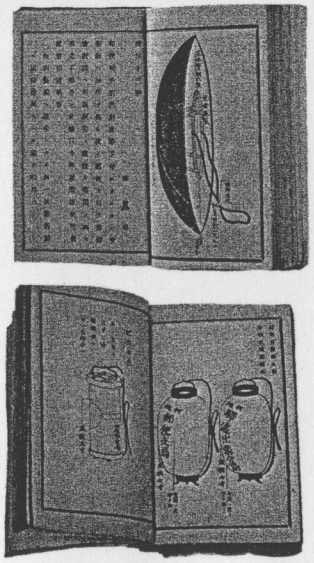
三、それでもなお危険な場合は、郵便袋を





明治六年の大森村租税目録（上）明治九年～十八年の各種辞令（中）明治九年辞令（下）

「いずれも星野　薫氏蔵」



郵便局の規定書「いずれも大森郵便局蔵」

捨てて逃げよ。

四、短銃所持を許可されている地方の駅夫は、このような場合、賊に向かって発砲してもかまわない。

などずいぶん物騒なことが書いてあります。

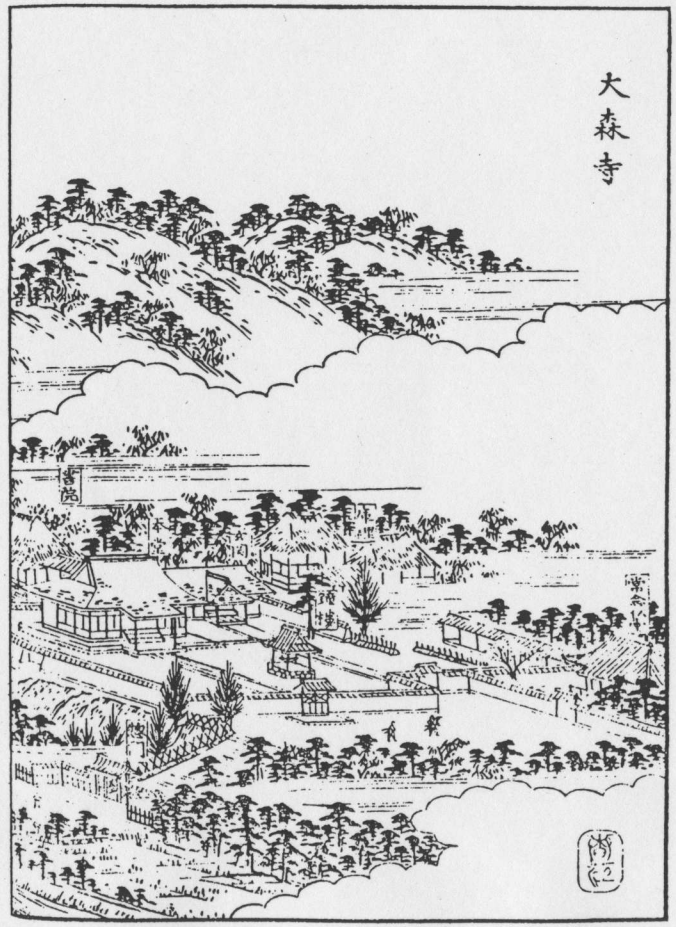
当時大森局の配達範囲は、大森はもとより小幡、守山、大幸、猪子石原、印場、新居、稲葉の広範囲にわたり、自転車もないころですから歩いて配達したのです。

さて大森局の初代局長星野佐吉氏が、今の郵便局より少し西に住む星野薫氏の先祖にあたるということを聞き、早速星野氏宅を訪れました。星野氏宅には「五等郵便局」と書かれた古い木の看板、やはり当時の駅逓頭、前島密の名の入った古い辞令などが大切に保管されていました。大森郵便局がはじめて開設された場所は、この星野氏宅であったそうです。

大森寺炎上

星野家で見せていただいた古文書の中に、「大森寺焼失記録」と和紙に達筆で書かれた明治八年の書類が目につきました。星野氏のご好意によってこの文書をお借りし解読に努め、難渋の末いろいろな事実が判明しました。光友によって寛文元年（一六六一）に建てられた大森寺が、幕末から明治にかけてたどった運命を、この「大森寺焼失記録」を中心として眺めてみましょう。

大森寺は建立当時、大森村新田および新居村新田を中心として、二百石の寺領を持っていましたが、元禄三年（一六九〇）境内の常念仏堂に対し、さらに百石加増され、計三百石の寺領となりました。これは当時竜泉寺が約四十石、赤津雲興寺が約百四十石であったのと比べると格段のものでした。しかし大森寺は尾張徳川家が唯一の檀家といってもよくまた寺格が高ければ出費も多いという弱点もあって、幕末には財政的に苦しくなり、慶応元年（一八六五）には寺領の村々に、年貢とは別に百両の借金を申し込んでいます。住職が長い病気の末死去して、その葬儀のため多額の出費があった、というのがその理由です明治維新による寺領の返還はこの寺に大きな



図(9) 尾張名所図会より「大森寺」

打撃を与え、明治四年には六間×六間半の規模を持つ常念仏堂を、名古屋の古道具屋へ売り払ってしまう状態でした。

これに追い討ちをかけたのが明治八年の火災です。東春日井郡誌には二月九日、大森寺焼失記録には正月四日となっていますが、これは新暦と旧暦のちがいでしょう。旧暦で記録をたどってみましょう。

明治八年正月三日夜十一時半ごろ、当時の住職吉田赫雲師が病気で亡くなりました。ところがその翌朝、本堂の北西にある新座敷と西門の間に煙が上るのを見て、人々はただちに消そうとしましたが火は燃え広がり、新座敷はもとより、七間四方の本堂、十間四方の庫裏などを焼きつくし、午前十時ごろ火は消えました。残ったのは宝蔵、土蔵、長屋くらいで、本尊は何とか運び出したものの、多数の宝物や記録などが焼けてしまいました。四日の午後県庁より警察係の横井昇永以下三人の官吏が来て、宝蔵入口に置かれた住職の遺体を検死し、その夜は村人十二人ばかりを呼んで番をさせ、出火当時寺に居合せた親族、僧、尼僧、檀家など七人に対し六日まできびしく「吟味」したそうです。出火理由は記録にないのでわかりませんが、焼け残った品々を調べてつぎの住職が決るまで封印して役人は帰りました。六日夕方にやっと住職の埋葬が済み、本尊は法輪寺に預けられ、五月になって後任住職が決るとともに、その翌月本尊も大森寺の土蔵へ帰ることができました。大森寺の災難ここにきわまった感じです。

瀬戸街道

大曽根から矢田、守山を通り、わが大森をぬけて瀬戸にいたる道路を、ふつう「瀬戸街道」と呼んでいますが、昔は「信州飯田街道」と呼ばれていました。瀬戸品野から遠く飯田へと道が続いていたからです。名古屋から中仙道を通って江戸へ出る場合、正式には小牧から鵜沼、または美濃太田へ出て江戸へ向いました。ところがそれでは遠まわりとなって不便ですので、大曽根から勝川、内津峠を越えて多治見に至り、大井（恵那）で中仙道に合流する近道がよく利用されました。安永二年（一七七三）文人として有名な横井也有がある晩大曽根から勝川へと通りましたが、その時のようすを、

「山田川かちわたるほど夜なほふかし。この川々はかち渡りなり。」

と記しています。つまり矢田川、庄内川には橋がなく、川に足をぬらして渡ったのです。そんなわけですから、大曽根から分れて東へ進む瀬戸街道も、今の矢田橋と長母寺の中間あたりを、通行の人たちは水にぬれて渡りました。文政十二年（一八二九）になっても橋はなく、ただ十月から三月までは川の水が冷たいので、流れの上にだけ仮橋をかけて渡し賃を取ったそうです。明治五年になってやや橋らしいものがかけられ、人は三厘、馬は五厘、車は一銭の通行料を徴集しましたが、金のない人はやはり水の中を歩いて渡りました。明治十七年にやっと本格的な木橋がかけられ通行料はなくなりました。

さて守山を通って東へ、小幡のあたりは明治になっても街道の南側にはほとんど人家がなく、やがて道は大森村へと入ります。一七八〇年ごろ、大森は二百八十戸、人口は千三百十一人という大きな村で、明治になってたばこ工場などができたことはすでに書きましたが、やはりそのころ街道沿いに大きな酒造工場があったことをお話ししましょう。

幕末のころ高木喜七という人が大森で「小松屋」という酒屋をはじめましたが、後に弟にあたる寺田清四郎という人がこれを継ぎ、街道の北側、今の大森駅の南のあたりに酒造場を建て、毎年冬には北陸から十人ばかり杜氏がやってきて、志段味を中心に、近村でとれた米を原料として酒造りが行なわれました。「松鶴」という名で売出された小松屋の酒は近隣の村々でも評判で、ずいぶん遠くから買いに来た人もあったそうです。今でも子孫にあたる寺田清氏宅には「祝新作酒造蔵」と書かれた明治三十二年の木札が保存されていますが、年間三百石の原料米を消費した酒造場の盛大さがしのばれます。

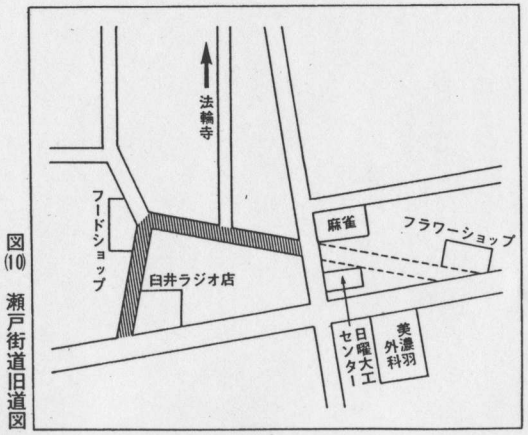
大森の人々は農業のほかに馬を使って瀬戸や赤津の陶器を運んだり、遠く品野まで木炭を買いに行って、それを名古屋まで運んで売りさばく人もいて、街道はたいへんにぎやかでした。瀬戸街道は明治十八年にはじめて大改修され、その後何度も改修されて道は広くなりましたが、昭和十二年ごろまで、瀬戸街道は法輪寺の南方で鍵の手にまがっていました。その頃の旧道の一部は今も残っています（第一図および第十図参照）

さて街道は印場を通りぬけて、新居の入口の八瀬ノ木で二つに分かれます。今も分岐点に

右せと・しなの　左きそふくしま

という道標が残り、「つんぼ石」が建っていて、その由来が書いてあります。藩祖義直が水野山によく狩に来た話は前にも書きましたが、一行はこの道を左にとり、新居の多度社の東にあった仮殿に泊って、昼間は狩をしたのでした。義直は狩のついでによく定光寺に立ち寄りましたが、ここが気に入って将来の墓所と定めました。そのようなわけで定光寺には尾張代々の藩主の墓があり、墓参のためよく藩主が往来したので、八瀬ノ木から左へ入る道を人々は「殿様街道」と呼びました。

一説によると、定光寺は万一名古屋城が落城した場合の藩主の避難所として計画され、定光寺の場所は一般の人には秘密にされていたので、八瀬ノ木の人々は定光寺の場所を聞かれても、つんぼになったふりをしたのが、「つんぼ石」の由来だともいわれています。



図(10)　瀬戸街道旧道図

激動の昭和史幕あけ

戦争――そして瀬戸電大事故

瀬戸電物語

明治三十五年ごろ、大曽根と瀬戸の間には乗合馬車が走っていました。一日六往復で料金は二十五銭でした。ちょうどその年、国鉄中央線の名古屋―中津川間が開通しましたが千種から勝川までは駅がなく、大曽根は素通りの状態でした。町がさびれるのを心配した大曽根の人々は、瀬戸の有力者に相談を持ちかけて、大曽根―瀬戸間に鉄道を設置して、国鉄と連絡する計画を立てました。そして明治三十八年四月には矢田―瀬戸間に単線の鉄道が開通し、フランスから「セルポレー式」という蒸気原動車を一輌買い入れました。一日八往復、料金は二十四銭という計画で営業を始めましたが、運転手一名、助手二名、車掌一名で、定員三十五人のこの乗物はなんとものすごいしろもので、火入れしてから運転ができるまで二時間かかり、矢田―瀬戸間の二十一キロを走るのに一時間二十五分もかかり、停車中にはコークスや水の補充で運転手も助手も大忙しで、おまけに急勾配では、しばしば「ハライタ」を起してストップ。従業員多数が出てあと押しをする始末で、二時間遅れなどはざらで四時間遅れることもしばしばあり、これでは歩いた方が早いくらいでした。そこで電化することになり、明治四十年には大曽根―瀬戸間に、はじめて電車が登場してやっと問題は解決しました。明治四十四年には大曽根―堀川間も開通し、翌年には国鉄の大曽根駅も設置されて、瀬戸の陶器の輸送がたいへん便利になりました。その後は線路の複線化に努力が払われ、矢田川鉄橋を最後に全線が複線になったのは昭和四年のことでした。

月ケ丘分譲地

大森郵便局で見せていただいた古い書類の中に、一束の奇妙な印刷物がありました。「月ケ丘分譲地」と印刷された昭和五年の書類ですが、今は分譲地などはあちこちにあって珍らしくも何ともないのですが、当時としては珍らしく、また内容もおもしろいのでここで紹介しましょう。

当時陸軍演習場として使用されていた大森の八竜山一帯が金六万円で地元に払い下げられましたので、これを「月ケ丘分譲地」として売りに出したのでした。すでに明治三十年に、陸軍歩兵第三十三連隊が、現在守山の自衛隊が駐とんしている場所に、地元によって誘致されましたが、その演習場として小幡ケ原が昭和二十年まで使用されました。小幡ケ原に続く大森の八竜山一帯も、昭和五年まで陸軍によって使用されていたものとみえます印刷された分譲地の図面を見ますと、翠松園のすぐ東から今の金城大学の敷地を含めて東は岬膳洞の近くまで、分譲面積は最低二百坪から広い所になると八百坪以上もありました興味があるのはその分譲価格で、坪あたり最低八十銭、最も高い所で二円三十銭でした。そして南方のふもとに近い区画はすでにかなり「売約済み」になっていました。最終的には売れ残った所も多少あったようですが、買った人もそこに家を建てて住んだ人はあまりなかったようです。当時の分譲価格を今の地価と比べてみるのもおもしろいことです。今の物価を当時の千倍としますと、坪二円ならば今坪二千円のはず、さらに十倍したとしても坪二万円、これで今、八竜の土地が買えるでしょうか。昭和五十年八月二十九日の朝日新聞に、つぎのような広告が出ていました。「大森、二一一一㎡、三八四万、八剣停二千米、即建、公道面」坪あたり六万円になります。地図で八剣バス停から真北に二千メートルの地点を測ってみましたら、山の奥の最も高い所でした。それでも坪六万円は安いそうです

昭和の斎田

戦前には「新嘗祭供御献穀」といって、毎年農村で特別に作った米と粟を、皇室に献上する行事がありました。そして昭和十二年に東春日井郡にそれが割当てられ、米は勝川町粟は守山町と決まり、守山町で場所を選定した結果、大森の志水鋼三氏の畑と決定しました。場所は宮畑といって、昔八剣神社のあった場所、現在の大森住宅の東部にあたる所です。

昭和十二年五月二十九日、宮畑ではおごそかな儀式のあと粟の種がまかれました。そして十四人の早乙女が、播種おどりを披露し、大森小学校の児童全員によって、つぎの歌が歌われました。

八剱の神に祈りてまく粟は
すめらみことの珍のみてぐら
新嘗の御饌の御代の斎畠に
ほまれは高し守山の里
おとめらが歌にあはせて播く粟の
やがて稔らむ八束たり穂に

その年の十一月二十五日には、できた粟の献穀のため、また盛大な儀式がとり行なわれました。なぜこんなに大げさなことをしたのか、今の若い人々には理解できないでしょう

守山大空襲

昭和十二、三年ごろのある日、森孝新田の人々は猪子石の月心寺に出頭するよう、陸軍から命令を受けました。月心寺には猪子石原の人や、庄中向の人も来ていましたが、そこで人々は森孝新田を中心にして約十三万坪の土地が陸軍によって接収されることを知らされました。当時軍の命令に不服を申し立てることは不可能でした。森孝新田の西部から猪子石原の新引山にかけてと、今の東名高速道路の東、守山東病院の一帯から一部は尾張旭市内にかけて軍用地となり、陸軍兵器補給廠が建設され、二か所の用地は広い道路で結ばれました。今森孝新田の八剱神社の前の道が

広くなっているのはその跡です。ここでは各地の工場から集められた軍用のトラックや戦車などを検査して、前線に送り出す作業が行なわれました。戦局はだんだんきびしくなり若い男子は戦場に送られ、多数の戦死者も出ました。食糧は不足し、物資もなくなり人々の生活は苦しくなりましたが、昭和十九年の十二月には、ついに米軍による大空襲が始まりました。まっ先にねらわれたのは、矢田大幸町にある三菱発動機でした。ここは当時の日本の航空機用エンジンの大部分を生産していた関係上、はじめはそんなに大きな工場ではなかったのですが、戦局の進展とともに拡張が続き、ついに西は矢田町から東は猪子石の西部まで、鍋屋上野の台地と矢田川にはさまれた地域を全部占有する大工場になっていました。数度の爆撃によって工場は壊滅し、工場周辺は蜂の巣のように爆弾の穴があき、それた爆弾は森孝地区の西部や大森橋の近くにも落下したそうです。多数の犠牲者が出たのは言うまでもありません。名古屋市内の主な軍事拠点を破壊してしまうと、米軍は焼夷弾による夜間爆撃を開始しました。これは一般民家をねらった無差別爆撃で、とくに昭和二十年三月十二日、十九日、二十五日の三回の夜間空襲により、名古屋市内は焼野原になってしまいました。当時名古屋市内から離れた純農村地帯であった大森が、三月二十五日早暁の空襲で大きなとばっちりを受けたのはまことに思いもよらぬ不運なことでした。爆弾や焼夷弾は北八剣のあたりにも落ちて数軒の民家が焼けましたが、大きな被害を受けたのは大森西部で、今の大森中学校の北西のあたりでは、多数の家が焼けたり破壊されたりして死者も出ました。ところで米軍機はなぜ大森を爆撃したのでしょう。夜間のため目標を誤ったといえばそれまでですが、当時八竜山に高射砲陣地があり、米軍機はそれをねらったのだという説もあります。高射砲陣地は名古屋周辺にたくさんありましたが、八竜山のそれは夜間わざわざ火を燃やして敵機をおびき寄せ、名古屋の被害を最少限にくいとめようとしたという話もあって、もしこれが本当なら大森の人たちは実にひどい目に会わされたと言うべきでしょう。記録によりますとその夜の空襲で投下された爆弾や焼夷弾は名古屋市内だけで三万二千四百発におよび、死者千六百人、焼けたり壊れたりした家屋は五千戸を超えました。それは当時の名古屋市内だけの合計で、今の守山区や名東区などの被害はもちろん含まれていません。その日、当時の守山町内だけで千四百七十三戸が被害を受けました。いずれにしてもこの夜の空襲は、大森にとっては長久手の合戦以来実に三百六十年ぶりの大きな災難だったわけです。

晴着を血に染めて

――瀬戸電大事故――

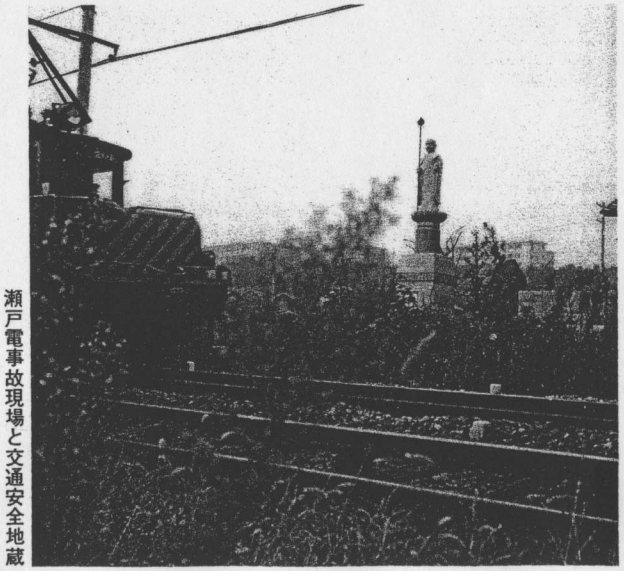
戦後も間もない昭和二十三年一月五日の午前十時十五分ごろ、法輪寺の裏の名鉄瀬戸線上で、ものすごい轟音とともに時ならぬ砂煙が巻き上りました。瀬戸発堀川行き上り急行二輌連結の電車が脱線転覆し、死者三十四人負傷者百八人（後に二人死亡）の大惨事となったのです。その時の模様を翌日の「中部日本新聞」の記事から拾ってみましょう。

「ひきさかれた枕木とレールの間には、頭がい骨や内臓が乱れ散って、首のない死体やまだポマードのにおいのする若者の死体がころがり、車とレールの間から大腸が露出し、ま新らしい足袋をはいた足がつき出ている。……（中略）…横倒れになった車内には新調の女のぞうりや正月用の祝酒や握りずしのはみだしたカバンが散乱し、そばに手足をもぎとられた死体がみられ、派手な晴着の袖や帯がひきちぎられているのも悲惨で目もあてられぬ凄惨さである。」

事故現場は米軍MP（憲兵）の指揮の下に警察や地元消防団員が警備にあたり、遺体を名鉄喜多山クラブハウスに収容するとともに、不通になった大森――旭前間は、「名鉄トラック」で連絡されました。

事故の原因は半径百六十メートルという法律で許されたぎりぎりの急カーブを、下り坂のせいもあってスピードを出し過ぎて走行したためでした。まず後部車輌が転覆、前部車輌は後部を引きずったまま五十メートルほど走って架線の鉄柱に激突して脱線転覆、大破しました。ちょうど正月で名古屋へ出かける乗客で満員だったため惨事が大きくなったのです。警察で調べた結果、運転手は入社して日も浅く、加えて、乗客を乗せて運転した経験はなく、当日も運転の予定がないところを先輩運転手に代ってくれと頼まれて運転したこともわかったのです。しかもこの運転手は三郷あたりで電車が急行であったのに気付きあわてて二、三の駅を通過し、法輪寺裏のカーブで急ブレーキをかけたところ、ブレーキが後車輌に連結していなかったため、後車輌がうき上り脱線転覆したものとわかりました。しかも当時瀬戸線を走っていた電車には速度計がなく、戦後の混乱期とはいえ、今では想像もできないことでした。

今現場には二つの碑が建っています。一基は法輪寺先代住職江口耕雲和尚が発起人となって、事故の年の五月に建てられた交通安全地蔵、もう一基は事故の一周忌に建てられた当時の名鉄社長神野金之助の筆になる殉職の碑です。法輪寺裏のカーブはその後改良工事が行なわれて事故の起こる心配はなくなったとのことです。



瀬戸電事故現場と交通安全地蔵

中部日本新聞　昭和23年1月6日

満員電車脱線轉覆

死者三十四、負傷百八名

森大付近の大惨事　瀬戸電

死者、負傷者の收容に全力

"あっこれは娘の靴"

悲惨、血染めの晴着散る現場

急速度魔の曲線へ

慌てゝ急ブレーキ

横倒しで引ずるカーブに速いスピード

判明せる死傷者名

関係者の談

十七名で七百万円

二年生になった公選知事

イヤ味のない社交家

墨屋もかせぐ小林知事

「三年の大計」練る林縣政

乏しい政治迫力

くだけ始めた官僚臭

仕事に熱中する吉田さん

ご報じた昭和23年1月6日（火曜日）付け中部日本新聞（現在の中日新聞）市内版。――中日新聞提供

郷土の文化財

「山車」と「棒の手」

毎年大森の夏祭りにはりっぱな山車が出されて引かれます。東春日井郡誌によりますと昔大森に悪い伝染病が流行して住民が苦しんだ時、大森寺の住職が疫病よけのため、大八車二輌を連ね、葬式用白張の提灯を多数その上にともしてそれを村の若者に引かせたのがその始まりだそうです。その後毎年旧暦の六月二十五日、悪疫流行の時はその都度臨時にこのような大八車が引かれました。後に東島の人たちが金を出しあって山車一台を購入して今までの大八車に代って村内を練り歩きました。祭はだんだん盛大になり、当日は各島ごとに馬を出して天王社を巡拝したそうですが、今の山車はその後一度買いかえたものだそうです。

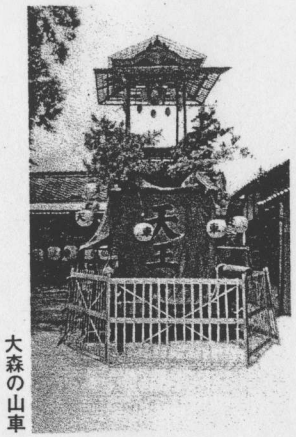
山車とともに大森が誇る文化財として「棒の手」があります。棒の手は旧東春日井郡から愛知郡、猿投などの西三河にひろがる地域で昔から受け継がれて来た郷土芸能です。その起源はいろいろと言い伝えられておりはっきりしませんが、一説には天文年間（一五五〇ごろ）加賀金沢の住人、本田遊無が愛知郡岩崎城主丹羽氏の領内配下にその術を伝えたのが最初とも言われております。その由来についても、

一、自衛のための武術

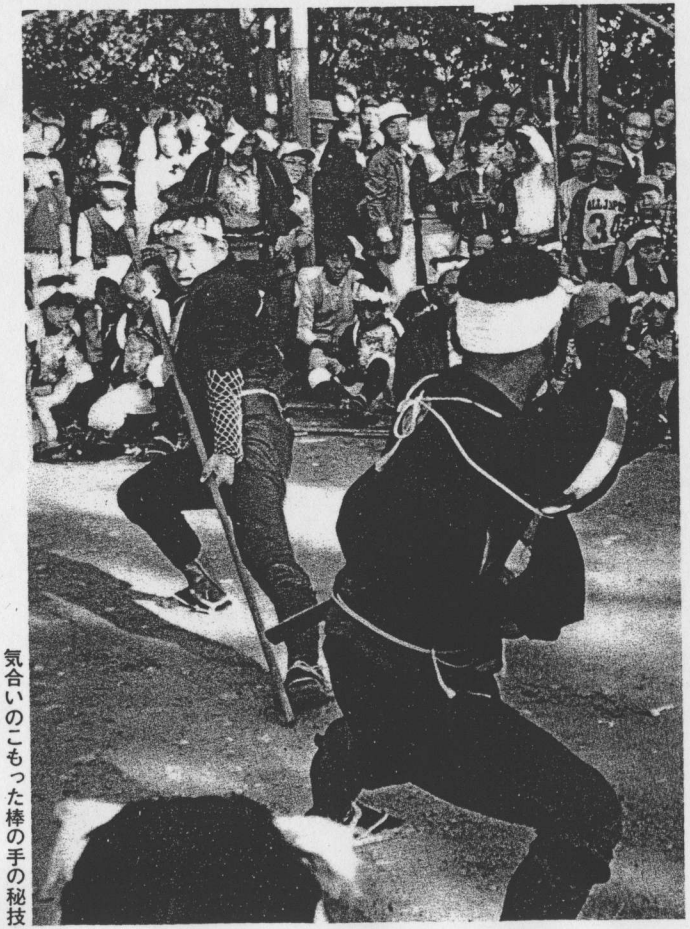
二、豪族の支配のもとで行なわれた戦技訓練

三、悪霊を追い払い豊作を祈るためのもの

などといろいろ言われますが、要するに戦国時代の農民の戦技が、後になって神事と結びついたのが棒の手であると考えてよいでしょう。棒の手は棒はもちろんのこと、槍、なぎ刀、太刀、鎌、木刀などを武器として戦うのですが、数種の流派があり、それぞれ奥義秘伝を持っていて師匠から弟子へと伝えられました。長久手の岩作には享保二年（一七一七）に本地村坂下に寄寓する平野平八郎が村人に与えた検藤流棒の手の免許状が残っていますが、同じ検藤流に属する大森では寛延四年（一七五一）以来の記録が現存していますので、棒の手が大森周辺の村々に広く普及したのは遅くとも一七〇〇年ごろと推定されます。検藤流の特徴などは素人にはわかりません。身をもって体験してこそ始めてそれがわかるのでしょう。長い伝統を絶やさぬためにも大森に住む一人でも多くの少年たちがこの郷土芸能を体験してほしいものです。



大森の山車



気合いのこもった棒の手の秘技

大森合宿

大森合宿は近くの十か村を誘って、大森が主催する大規模な祭礼です。方言では「おまんと」と言いますが、これは「馬の塔」がなまったものです。各村から固有の標具をつけた飾馬を出し、行列は村印、区長、祭事係、杖つき、鉄砲手、警固、飾馬、馬囲、馬丁の順に威儀を正して進み、決められた場所で一斉に火縄銃を発射しながら竜泉寺に至り、境内で棒の手を奉納する。この祭は厳格な統制が伝統的に保たれ、参加する村々、行列の順位、団体の進退、馬上の標具、村と村との出合い、挨拶の場所まで昔のしきたりが厳守されました。この合宿の起源について、守山市史、猪高村誌、長久手村誌、東春日井郡誌などの記述を総合しますと、

一、戦国時代に大森城主築田出羽守が、領内の村民と相談して竜泉寺に戦勝祈願をしたのが始まりである。

二、元禄年間（一七〇〇ごろ）に当地方が干ばつに襲われた時、竜泉寺に雨ごいをしたところ大雨が降ったので、そのお礼のために献馬したことに始まる。

三、長久手合戦で焼失した竜泉寺を再建した秀純和尚が高針出身であったため、工事をとりもちした高針村を含めて献馬が行なわれるようになった。

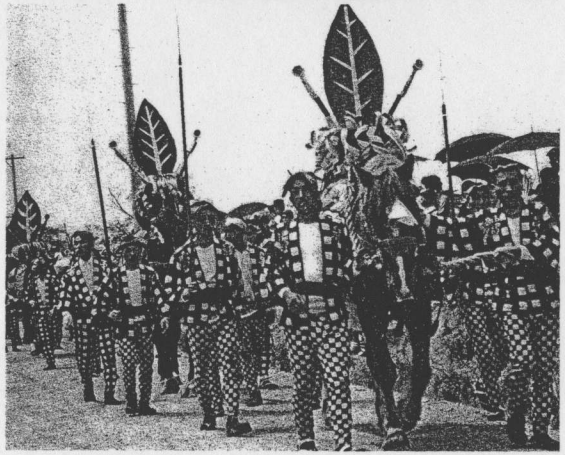
などとなっていますが、正確なことはわからないようです。

大森合宿の行列の順、村名、馬数と標具はつぎの通りでした。

一、大森村　四頭　たばこの葉ときせる
二、印場村　一頭　破竹のたけのこ三本
三、庄中村　一頭　真竹のたけのこ三本
四、新居村　二頭　けしの花と葉数本
五、稲葉村　一頭　馬びしゃく二本
六、長湫村　二頭　大団扇と幟二本
七、藤森村　一頭　底ぬけびしゃく二本
八、上社村　一頭　矢数本
九、一社村　一頭　ひしゃく
十、下社村　一頭　小鳥毛
十一、高針村　四頭　大鳥毛

実物を見ないとようすはよくわかりませんが、三百年前の農村の素ぼくな生活をしのばせるに足る物ばかりのようです。

火縄銃の発射

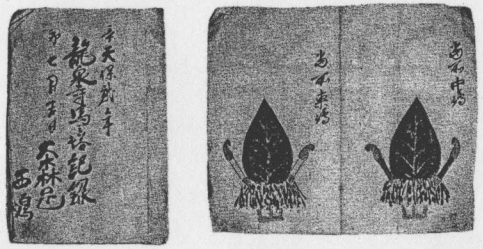


飾り馬の列

祭の日は昔は五月十八日でしたが、後に十月十八日になり、その年に献馬を行なうかどうかは稲作の調子などを見て決定されました。決行となれば大森村から各村に回章（通知状）が出されましたが、その文は一字でも誤りがあってはいけないとされました。今も大森に現存している天保二年（一八三一）の回章を内藤金作氏に見せていただきましたが、実に美しい字で書かれており、筆者の教養の深さがしのばれます。

各村の参加が決まると、大森は村中あげて祭の準備に忙殺されましたが、当日は午前二時に起床の合図の鉄砲が放たれ、午前四時の集合の合図とともに人々は装束を整えて出そろったそうです。午前十時ごろ東からやって来る印場や新居など四か村の行列を中島天王社前で整列して出迎え、ついで南方からやって来た長湫や高針など六か村の行列を大森橋上で出迎えて大森寺の参道へ案内します。これらの行列の出迎えや応接などはすべて古来の礼儀やしきたりが守られました。

かくして全村がそろったところで大森村の行列を先頭にして威儀を正し大観衆の見守る中を一糸乱れぬ統制の下に竜泉寺を目ざして行進するのですが、この祭礼に大森の人たちが払った努力と費用は莫大なものでした。しかしその過程で若者たちは村の伝統やしきたり、礼儀作法を身をもって教えられたのでした。昭和になってからの大森合宿は昭和十一年十月十八日に盛大に行なわれ、その時の模様は寺田清氏によって守山市史にくわしく書かれています。戦後は昭和二十年代に一回行なわれましたが、この時は藤森は空襲で標具などを焼いたためについに参加しませんでした。大森合宿はその後は一度も実施されておりません。戦争を境にして大森ばかりでなく日本全体の社会環境が大きく変わってしまいました。住民の大部分が農民であった戦前の大森とはちがって、サラリーマンなどが多くなり、合宿の準備のために何日も会社を休むことはできず、昔はたくさん飼われていた馬も、今はすべて車に変って一頭もいません。長い行列を通すために瀬戸街道を通る車をストップすることもまず不可能でしょう。合宿の開催ができない理由は何も費用の問題ばかりでないことがこれでおわかりになるでしょう。しかし、このような長い伝統を持つ行事は、それを実際に体験した人々が年老いていなくなってしまったあとではもう復活することができません。大森合宿を再びこの目で見ることができたら何とすばらしいことでしょう



龍泉寺馬之塔記録

大森・森孝歴史遊歩道

さて今まで大森・森孝の歩んできた足あとをたどってお話してきましたが、ここで私たちは実際に歩いてそれをたどり、自分の目でそれを確かめてみましょう。もちろん大森・森孝は京都や奈良とはちがいますので、誰でも知っている有名な名所などあるはずがありません。ほとんど人に知られない所ばかりです。それだけに余計味わいがあるかも知れません。名づけて「大森・森孝歴史遊歩道」。一部は隣の印場、庄中、猪子石、小幡を通りますが、第12図（別刷カード）を参考にして歩きましょう。出発点は名鉄の大森駅前です。

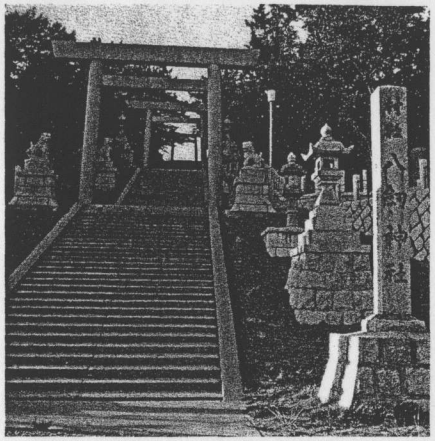
八剱神社

駅の西北にある八剱神社の石段をまず登りましょう。神社は昭和二年に旧地よりここへ移されましたが、境内はよく整備されています。山上からの眺めはよくて、遠く猪高方面まで望まれます。

さてここで八剱神社の社名の由来について少し考えてみましょう。八剱という名を持った社は、八幡社や白山社ほどではありませんが各所にあり、郡誌にも大森や森孝以外に、上水野、中品野、下半田川など、東春日井郡内に五か所ばかりその名が見られます。江戸時代はもっと多かったそうです。祭神は明治になっていろいろな神が合祀されましたのであまりはっきりとしませんが、須佐之男命と日本武尊が多いようです。大森の八剱神社の祭神もそうなっています。八剱神社の本宮と考えられるのは、熱田神宮の南方に今もある八剱神社です。尾張名所図会によりますと、そこは熱田神宮の七つの摂社の一つで「下の宮」と稱し、正一位八剱大名神として、「延喜式」や「本国帳」にも記載されている古い社で、その由緒によれば和銅元年（七〇八）新造の宝剱を納めて「八剱宮」と稱したとあります。また祭神についてはよくわからないとしながらも、日本武尊らしいとしており、また八剱の意味について、

八剱とは、尾に八岐あるを表せしなるべければ……

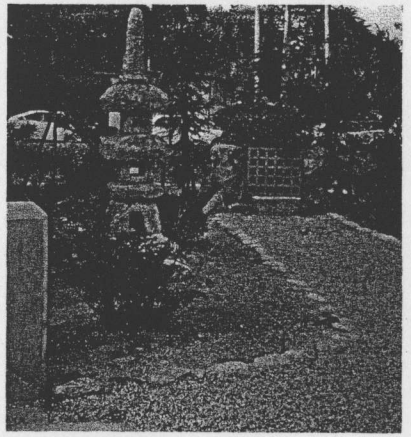
と書かれていますので、八岐大蛇を退治した須佐之男命とも関係がありそうです。



八剱神社

弁財天と奥の院

神社の東側の山すそに弁財天が祭られています。近くには古い五輪塔らしきものも見られますが、この社は大森郵便局長をしていた故臼井作次郎氏等が、昭和の初めごろ比叡山から勧請したものだそうです。そこから北へ金城大学の方へ行く道を少し登りますと、右手の小さな池の中に島があって橋がかけられており、そこに弁財天の「奥の院」があります。以前この池はもっと広く、木も茂って幽すいな気分のする所でした。今の弁財天の由来は新らしくても、このあたりの地名である弁天洞の名は昔からあったそうで、弁財天がインドでは河川の神であることを考えますと昔からこの谷が大森の水源の一つとして重要視され、古い時代にも弁天が祭られていたのではないでしょうか。



弁財天奥の院

竜神社

「奥の院」から北へ金城大学の間を登りつめると、右手、大学のテニスコートの彼方によく木が茂って峯のようになった所が見えます。これが竜神社で、八竜の地名のもととなった社です。道を北へつき当り、右へ行くと神社の裏へ出ます。この神社のある位置は雨池から新池へと続く谷のもっとも奥にあたり、やはり大森の大事な水源地として水の神である竜神が祭られたのでしょう。雨が降らないと大森の人たちはここに集まって雨ごいをしたそうです。

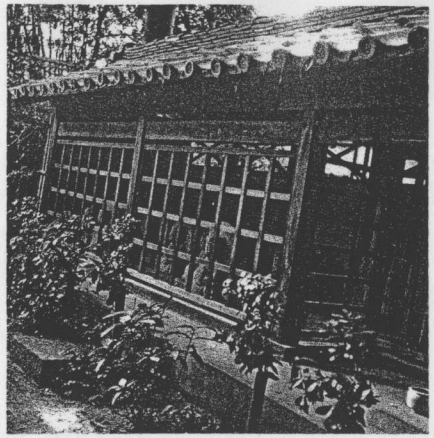
竜神社の正面の細道を南へ下りますと新池へ出ますが、このあたりは植物学上貴重な湿原になっています。昭和五年に八竜山一帯が「月ケ丘分譲地」として売出された時、ここは湿地なので誰も買い手がなく、今も大森の共有地として残されました。道路ができて車でも入るようになれば、貴重な植物は滅びてしまうかも知れません。だいじに保護したいものです。

大森寺

山を下って今度は大森寺を訪れましょう。この寺は尾張徳川家が唯一の檀家と言ってもいいほどでしたが、幕末には寺の財政も苦しくなり、明治八年の火災によって大きな打撃を受けたことはすでに書きました。その後、明治二十四年の濃尾大震災でさらに被害を受け、昔の寺観をすっかり失ってしまったそうです。しかしながら今、私たちは大森寺の広い境内に立ってみますと、よく手入れされた庭は心地よく、寺全体にすがすがしい気分が満ちあふれています。今の本堂は火災の後、名古屋の建中寺から移されたものだそうです

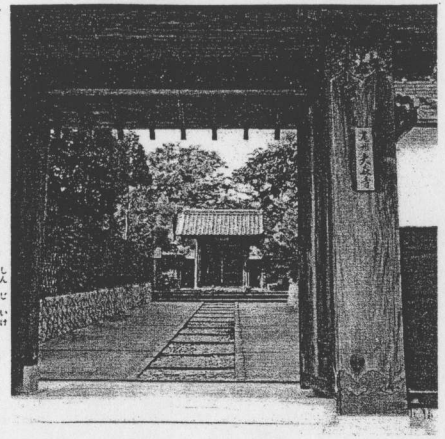
法輪寺

大森寺から線路づたいに東へ行きますと、



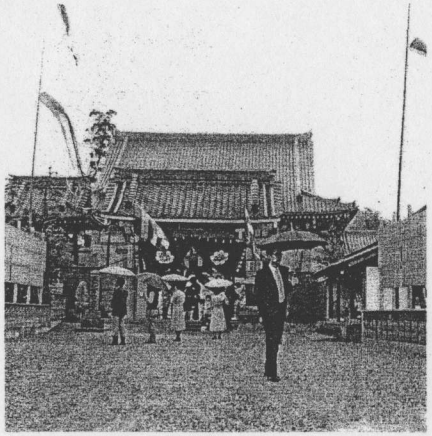
大森寺石仏群

が、本堂の西側には大きな心字池を中心とした静かな庭があり、池に落ちる小さな滝の水音を聞きますと、ここが名古屋市内だとはとても信じられません。何と言っても大森寺は大森一の「名所」ではないでしょうか。本堂裏手にある歓喜院乾の方の墓とともに見逃せないのは境内の東北部の旧念仏堂のあったあたりにある石仏群でしょう。安永（一七七〇ごろ）の銘があります。昔の大森寺については「尾張名所図会」（第九図）でその姿を知ることができますし、名古屋の蓬左文庫にも「大森寺山絵図」および「大森寺山之図」という大きな図面が残されており、その壮大さをしのぶことができます。



大森寺山門

法輪寺のすぐ裏手の名鉄線の北側に、大きな地蔵尊と碑が建っています。昭和二十三年の大事故の供養塔です。事故前の線路は今よりもっと北方に大きくカーブしていたそうです法輪寺の山門前右手に天保二年（一八三一）の銘がある石の三十三観音が見事に並び、左手には天保十四年の庚申塚が建っています。山門の前の「山門禁葷酒」の石柱には寛政八年（一七九六）という字が読め、あたりに何となく古寺のおもかげを残していますが、一歩山門内に足をふみ入れるとそこにはま新らしい近代的な堂宇がそびえ、思わず目を見張ります。案内を乞うて本堂に上りますと、天井から下る巨大な天蓋や内陣に設けられた総ケヤキ造りの須彌壇の豪華さに圧倒されます



法輪寺山門附近

堂内すべて新しさに満ちている中に本尊の釈迦如来は左右に文珠・普賢両菩薩を従えて昔ながらの姿を拝することができます。昔この寺は元郷にあって正宗庵と稱していましたが応永元年（一三九四）兵火にかかって衰え、再建のために地下に埋められたと伝えられる黄金をさがし求めたがついに発見できなかったことは前に書きました。やっと天文三年（一五三四）になって赤津雲興寺の大雲和尚が曹洞宗の寺として再建し、名も正法寺と改めましたが、五十年後の天正十二年の長久手の戦にまた兵火にかかり、寺は荒れて無住になってしまいました。江戸時代に入って寛文二年（一六六二）に澄然という僧が村人と相談して寺を元郷から今の地に移して再建し、安永三年（一七七四）には山号も今の法輪寺と改められましたが、六年後の安永九年八月四日に火災で焼失しました。堂宇の再建が成ったのは寛政四年（一七九二）ですが、途中明治二十四年の濃尾大震災で裏の雨池の堤が決壊し、寺宝の大般若経六百巻のうち約半数が流失するという災難があったものの、寺の建物は最近改築されるまで残されました。このように法輪寺は他の多くの寺と同様何度も火災に会っていますが、例の「此御寺牛刀二日置之也」というなぞの文が書かれている本尊の釈迦如来と文珠・普賢両菩薩および地蔵菩薩はすべて佐藤兄弟の母が奥州からとりよせたものと伝えられますが、若干の疑問がないわけではありません。安永の火災の時には本尊、寺宝すべて運び出したという記録があるものの、天正および応永の兵火の時はどうであったのかはっきりしません。それに台座も入れて三十センチメートルぐらいの地蔵尊はともかくとして、本尊の三体はかなり大きく、交通不便な時代にこれを奥州より運んだというのも、やや不自然なことです。昔の伝説をもとにして後世に造られたものかも知れません。しかしながら寺宝の大般若経は貞治二年（一三六三）の銘があるそうで、もしこれが事実なら応永の兵火の前に書かれたことになり、本尊も案外古い時代のものかも知れません。法輪寺の寺宝の中には辨慶が書いたと伝えられる書簡などもありますが、もっとも注目すべきは薬師如来像でしょう。昔大森の西島に薬師堂があり、寛文覚書にも、

一、薬師堂二宇　地内年貢地
　　堂守　当村　了悦　念西

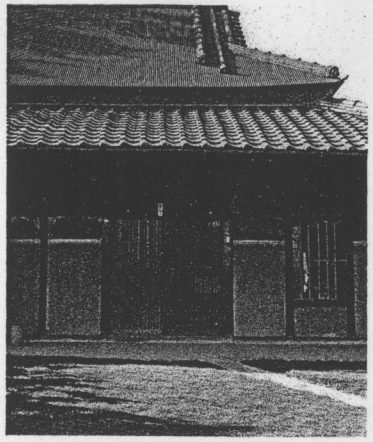
と書かれていますが、西島のそれはその中の一つであったのでしょう。この薬師堂が後に法輪寺内に移され、昔は今の衆寮堂の建つ場所にあったそうです。今でも本堂内に当時の薬師像を安置した廚子が残されていますが見せていただいた薬師像は、直径三十センチメートルくらいの丸い木の板に青銅の板を張り、その中心に小さな薬師像がとりつけられていて、ちょうど一種の壁掛けのように上から吊すようになっているきわめて珍らしい形式のものでした。裏面には慶長二年（一五九七）などの字も書かれており、長年にわたって農民が信仰した像にふさわしい素ぼくさを

持っています。

本堂の北側にはこれまた新しい位碑堂があり、その正面に道元禅師や大雲和尚の木像が色もあざやかに修復されています。これらの像も修理されるまでは色あせてほこりでまっ黒だったそうです。私たちはとかく寺といえばすべて古色そう然としているのがよいと考えがちですが、法輪寺へ来てそれが正しくないことに気がつきます。どんな寺でもその当初はすべてが新しかったわけで、新しい建物にこれらの木像の色あざやかさがよくマッチしています。昭和五十年十月十二日、法輪寺は新堂の落慶法要を盛大に営みました。法輪寺に属する檀家は新旧合せて約八百軒、ここはまた大森寺とは趣を異にした大森の「名所」ではないでしょうか。

瀬戸街道

法輪寺から南へ歩きますと、昔鍵型にまがっていた瀬戸街道の旧道に出ます。昔の道幅はもっと狭かったそうです。たくさんの人馬が毎日ここを通って名古屋や瀬戸へ急ぎました。明治の中ごろには農家の人たちは大八車に肥桶を積んで大曽根や遠く名古屋の城下まで肥汲みに出かけました。樽に二本から四本肥を汲んで帰るのですが、雨でも降ると道がぬかるんで、車ごとひっくり返ることもあり肥を全身に浴びたり、流れた肥をもったいないと弁当箱ですくった人もあったといいます。けっして笑いごとではありません。当時は肥を汲み取らせてもらう家の家族一人に対して年一斗二升のもち米を持って行く習慣でしたこれではあんまりだというので、明治三十五年ごろには半分の年六升になったそうですがとにかく農家にとって肥は貴重品でした。



酒井平吉氏宅の外観

瀬戸街道のすぐ南に酒井平吉氏宅があります。日露戦争当時の建築だそうですが、梁の太さなどもう今の建築では見ることができません。麦わら屋根を今はトタンで囲ってありますが、そんな屋根も大森ではほとんど見ることができなくなりました。

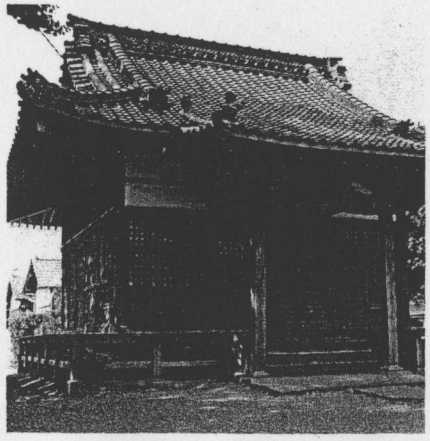
瀬戸街道を東へ、名古屋トヨペットの裏に斎忌斎田の項で書きました斎穂社がありますが、そのすぐ隣にある「千手観音」も区画整理前は、斎穂社と同じく瀬戸街道沿いにあったそうです。享保二年（一七一七）とあるこの石像は、八本の腕に弓矢を持っていますので、千手観音ではなく青面金剛とも考えられます。この像のすぐ横に小さな庚申塔があるのに気付くでしょう。庚申塔はすでに大森寺境内、法輪寺山門前にもありました。庚申とは「かのえさる」のことで、六十一日目に必ずめぐってきます。道教ではその夜寝るとその人の命を縮めると信じられ、徹夜をしたのだそうです。これを庚申待ちといい、江戸時代になると近所の人たちが講を作って寄り合い、一種の社交の場になりました。そして、その守護神として青面金剛が祭られるようになったそうです。

斎穂社のとなりにある千手観音

瀬戸街道をさらに東へ、沓合坂の入口、名鉄バス停の北側に二、三本松が生えていて、その下に小さな祠がありますが、「白竜さん」と呼ばれ、以前はもっと大きな松が街道におおいかぶさるように出ていたそうです。さらに東へ東名高速道路の下をくぐりますと、もうそこは印場ですが、右手ななめに旧道を行くと、左手に印場の庚申堂があります。本尊はやはり青面金剛です。さらに旧道を進みますと左手に渋川神社があり、境内に斎忌斎田の大きな石碑が建っています。

円空仏の観音堂

瀬戸街道はこの先、新居の入口に八瀬ノ木の「つんぼ石」がありますが、遠くなるので引返し、庚申堂の少し東を南へ折れますと、道は天神川にかかった舟橋を渡ります。そこから西南方二百メートルぐらいの田の中に一段と高くなって畑地となっている場所が見えます。これが印場城址だそうで、わが大森の尾関が城もこんなふうだったかと想像されます。印場もやがて区画整理をするそうですから、今のうちに見ておくといいでしょう。さて庄中の渋川小学校の西隣に小さな観音堂があります。小さいながらも屋根瓦などはりっぱなものですが、中には優れた円空仏があります。本尊の十一面観音は秘仏でふだんは見られませんが、四体の脇待は拝観できます。像の高さは一メートルぐらいで、まわりには盗難を恐れて堅牢な鉄のおりが巡らされており、見る者に異様な感じを抱かせます。堂の東側にはやはり庚申塚や文化文政期（一八一〇ごろ）の石仏が並んでいます。庄中の東端に直会神社がありますが、実に簡素で昔の本当の神社の姿を見せてくれます。



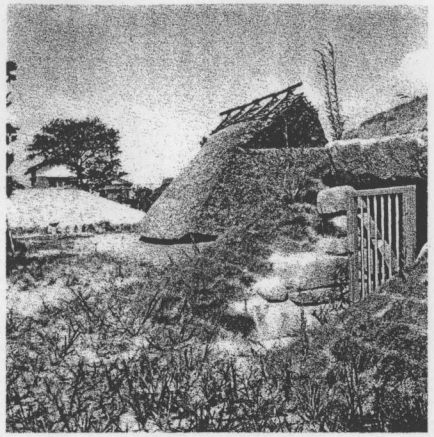
円空仏の観音堂

大塚古墳

矢田川を渡り庄中向の信号を左折して広い道を東へ歩きますと、右側に復元された古代住居やよく手入れされた古墳が目につきびっくりさせられます。ここは庄中向の大塚古墳といって、地元の土地区画整理組合で整備保存しているのですが、すぐ西隣の加藤氏宅に頼めば入口の錠をあけて中を見せてもらえます。大塚のまわりには埴輪なども並べて置かれ、古代の姿をまのあたりに見ることができます。

大塚のすぐ東南の山上には本地が丘団地がそびえていますが、その斜面を登ってふり返りますと、眼下には矢田川から庄中、大森方面まで眺められ、私たちが今までたどった道がよく見えます。山の下は長久手合戦の時の白山林の古戦場であり、羽柴・徳川の両軍が必死になって戦った天正の昔をしのぶのもよいでしょう。

本地が丘団地の市バス停から東へ新しい団地の間を進むと、東端の配水塔のあるアパートの下に天狗岩古墳があります。ここはいわゆる「白山」の頂上で、眼下に矢田川がせまり、眺めも非常によいことをつけ加えておきましょう。なおここから南方へ山を下った所に本地ケ原神社がありますが、その境内にある「黒石」は四軒家東の黒石にあった石で、古墳の石室に使われていたものと推察されます。どういういきさつでこの石がわが学区から外へ持出されたかは知りませんが残念なことです。



整備された大塚古墳

勘解由塚

長久手合戦のおもな遺跡は長久手町の岩作の週辺に集中していますのでここでは述べませんが、一つだけわが学区の比較的近い所にある「勘解由塚」を紹介しましょう。この塚は白山林から敗走して来た三好秀次が、乗馬を討たれて徒歩で逃げるのを見て自分の馬をすすめて逃がし、追撃して来た徳川勢と戦って戦死した木下勘解由利匡のもので、森孝住宅の東南五百メートルの所にあり、下川原橋または、草掛橋で香流川を渡って行くことができます。塚の少し東には利匡の兄利直の塚もあります。

おさ塚

さてせっかくここまで来ましたら四軒家の古墳も見ておきましょう。四軒家の交差点を南へ、香流川の橋の手前を左へ川の北岸の堤防を少し行くと北側の田の中に高くなって木が生えている所が見えます。夏は草が茂って近寄れませんが、冬なら近くまで行けそうです。このあたりも団地の建設が計画されているそうで、保存の処置がなければこの塚もやがて消えてしまうでしょう。

庄中向の信号の北の地下道のある所から道を西へたどり、東名高速道路の下をくぐる手前の北側に、樹木が茂った一画が目につきます。これが「おさ塚」で四軒家の古墳とともにわが学区に残された数少ない古墳です。この塚は名前のごとく東西にやや長い形をしております。できた時代などは不明ですが、できれば末長く保存したいものです。

三十三観音周辺

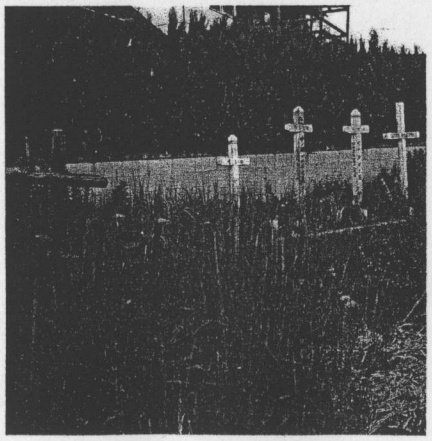
東名高速道路の下をくぐって大森向住宅の南で左折し、やや広い道を進むと旧山口街道につき当った左手の角に一体の石仏が祭られています。石にきざまれた字をよく見ますと、「右せと、左のふらい」と読めるはずです。そこから西へ百メートルも行くと、左手の角に美しい三十三観音の石像が並んでいます。この石仏は以前はもっとりっぱな堂に安置されていたのですが、道路拡張のため今のようになってしまったそうです。今でも盆の十七日の晩には地区の人たちが集まってご詠歌をあげるそうですが、昔は夜店まで出るにぎわいであったとのことです。

観音堂の角を左折して百メートルばかり、右手の畑のむこうに肥後守平氏宅の蔵が見えてきます。天明五年（一七八五）の鍵がありわが学区の建物としては恐らくもっとも古いのではないでしょうか。

肥後氏宅の南方に森孝新田の八劔神社があり、境内にある公会堂は昔の大森小学校の古い校舎を移築したもの、すぐその西側には弘法堂もあります。

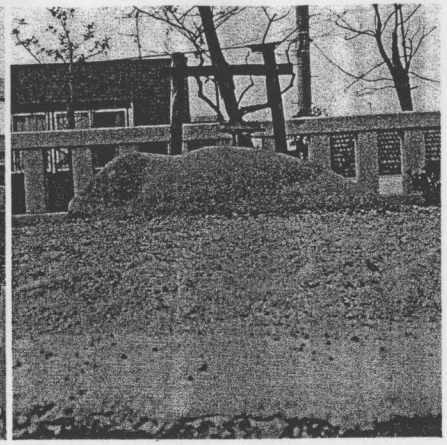
猪子石

南方の猪子石街道へ出て、三軒家のバス停から南へ区界にそって細い道を歩くと香流川に出ます。右折すると川ぞいに墓地があります。すでに、なかば朽ちた木の十字架なども見えますが、明治時代の石造の墓碑もあり、すべてキリスト教徒の墓で、どこかの教会に属する墓地だと聞きました。

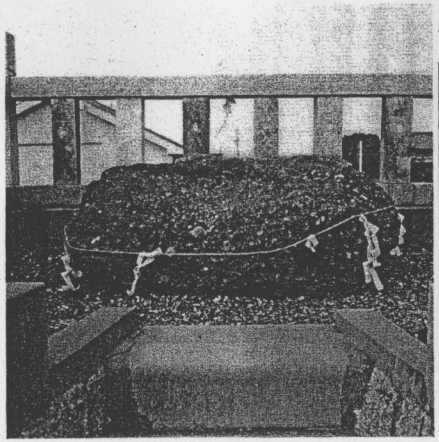


キリスト教徒の墓地

猪子石の地名の由来は当地にある同名の石から来ています。石は二つあって香流小学校の北、香流川の北側にあるのが「おす石」。花崗岩でイノシシにたいへんよく似ています。小学校の南方の丘の中腹には「めす石」があり、石は礫岩でこちらはあまりイノシシには似ていません。二つの石はともに神聖視されて、地元によってそれぞれ猪子石神社、大石神社のご神体として祭られています。これか



猪子石（おす石）



猪子石（めす石）

の石はたぶん昔は古墳に使われていたものと思われますが、とにかく珍らしいものです。

小幡

さて少し遠くへ来てしまいましたので、そこから北へ小原橋で矢田川を越え、千代田街道も横断して小幡へ出ます。駅前から北へ緑地公園の方へ百メートルも歩きますと左側に長慶寺があります。この寺は山田次郎重忠の建立と伝えられ、境内にある石造の無縫塔は十四世紀のもので、形も非常に珍らしく、名古屋市の文化財に指定されています。

小幡から東へ喜多山まで来たら、長塚古墳と池下古墳を訪れましょう。駅から北へ二百メートル、左折して百メートルで長塚古墳、同じく右折して百メートルで池下古墳です。ともに大きな前方後円墳で、長塚古墳の方には説明の掲示が立てられています。

大森橋周辺

私たちの周遊コース歴史遊歩道もそろそろ終りに近づきました。大森口のバス停から南へ入り、大森中学校の北側まで来ますと、そこに志水鋼三氏宅があります。志水邸はかって大森一の大地主として広い田畑を所有し、毎年千俵近い年貢米が邸内の米蔵に収められたそうです。その蔵も最近になって取り壊されましたが、大正元年に成るどっしりとした門を構えた志水邸の持つ重量感はすばらしいものです。

最後に私たちは大森橋の上に立って四方を見渡してみましょう。東部は東名高速道路の土堤のため、それより東はよく見渡せませんが、そのほかはほとんど目に入ります。橋の北詰めは元郷でわが大森の発祥の地です。南方の下市場にある高圧線の鉄塔のあたりが、築田（ぐんた）が城（じょう）のあとです。大森橋は大正時代になっても水流の上に板を渡しただけの仮橋で、出水のたびに橋の板を流され、川南の小学生は学校を休んだそうです。今でもこの橋が急になくなれば同じことが言えます。大森橋こそはわが学区にとってもっとも重要な「かなめ」なのです。

古い歴史を持った大森もはげしい都市化の波を受けて急速に変わりつつあります。昔のことはどんどん忘れられ、由緒ある習慣、しきたりは捨て去られ、貴重なものはそれと知らず壊されつつあります。この小冊子を読まれた方々がたとえ少しでも大森の歴史に関心を持ち、失なわれてゆくものの保存に力を注いでいただければ幸いです。

× × × × ×

年表

西歴	年号	日本史	西歴	年号	大森・森孝関係
六四五	大化元	大化改新			
六四六	大化二	班田収授の詔勅			
六五二	白雉三	班田収授の法施行			
六七二	（弘文二）	壬申の乱			
六七六	（天武五）	新書祭の斎紀斎田に尾張国山田郡と決まる。	六七六	（天武五）	斎紀斎田を印場渋川の地に決定
七五二	天平勝宝元	東大寺大仏開眼			
七九四	延暦一三	平安遷都	七九三	延暦十二	山田連大森八鄙神社を建立
八五八	平安二	藤原良房摂政となる	八六〇	貞観二	大森城主尾関勘八郎正宗庵（法輪寺の前身）を建立
九〇一	延喜元	菅原道真太宰府へ左遷			
九〇五	延喜五	この頃尾張国より毎年陶器を献上	一〇〇〇ごろ		このころ尾張国に東大寺の荘園五八〇町歩
一〇一六	長和五	藤原道長摂政となる			
一一五六	保元元	保元の乱			
一一五九	平治元	平治の乱			
一一八四	寿永三	屋島の戦、佐藤嗣信戦死	一一八四	寿永三	山田郡八条院領となる
一一八五	文治元	平家惣ノ浦に亡ぶ			
一八三七	天保八	大塩平八郎の乱			
一八四五	弘化二	水野忠邦失脚			
一八五三	嘉永六	ペリー浦賀に来航			
一八六〇	万延元	桜田門外の変			
一八六七	慶応三	大政奉還			
一八七一	明治四	廃藩置県			
一八七二	明治五	学制を定める			
一八七三	明治六	地租改正			
一八七七	明治一〇	西南の役が起こる アメリカ人モース東京大森貝塚を発掘			
一八三七	天保八	矢田川洪水			
一八四〇	天保一一	森孝新田、山口街道にのふらいの石仏が建てられる			
一八四三	天保一四	法輪寺の庚申塚が建てられる			
一八五五	安政二	矢田川洪水、雨池の水もあふれる			
一八六〇	万延元	矢田川洪水			
一八七一	明治四	大森寺の常念仏堂が売払われる			
一八七二	明治五	矢田橋がかけられ通行料を取る			
一八七三	明治六	地租改正で農民大いに苦しむ			
一八七五	明治八	法輪寺衆寮堂で三林学校が開校される			
一八七六	明治九	大森寺焼失 大森郵便局開局、初代局長星野佐吉			
一八七七	明治一〇	雨少なく干害			
一八八〇	明治一三	春日井郡を東西に分ける			
一八八三	明治一六	干害			
一八八四	明治一七	町村役場設定 矢田橋完成、通行料を廃止			

一一八六	文治二	佐藤忠信戦死	一二〇〇ごろ	このころ佐藤兄弟の母、正宗庵に立ち寄り堂宇を修造
一一九二	建久三	鎌倉幕府成立		
一二三八	承久三	承久の乱、山田次郎重忠戦死	一三六一	康安元
一三三六	暦応元	室町幕府成立	一三六三	貞治二
一三六八	応安元	足利義満将軍となる	一三九四	応永元
一三九二	明徳三	南北朝合一		
一四六七	応仁元	応仁の乱が起こる	一四七〇ごろ	水野宗国大森城を攻め尾関氏を滅す
一四九五	明応四	北条早雲小田原城を攻略		
一五二〇	永正一七	室町幕府徳政令を出す	一五二四	天文三
一五四三	天文一二	ポルトガル人種子島に鉄砲を伝える		
一五六〇	永録三	桶狭間の戦	一五八四	天正十二
一五八四	天正一二	小牧、長久手の戦		白山林で徳川軍、三好秀次の軍を破る
一六〇〇	慶長五	関ケ原の戦		正法寺兵火にかかる
一六〇七	慶長一二	徳川義直尾張藩主になる		
一六一〇	慶長一五	名古屋城が築かれる		
一六二五	寛永二	徳川光友生まれる		
一六三四	寛永一一	光友将軍家光に謁する	一六三四	寛永一一
一六三七	寛永十四	島原の乱		
一六四九	慶安二	義直没す		歓喜院乾の方没す
一六五七	明暦三	江戸大火（振袖火事）死者十万人	一六五〇ごろ	このころ大森の人家元郷より現在地に移る
一七〇〇	元禄一三	光友没す		
一七〇二	元禄一五	赤穂浪士、吉良邸へ討入り		
一七一六	享保元	徳川吉宗将軍となる	一六六一	寛文元
			一六六二	寛文二
			一六九〇	元禄三
一七六七	明和四	田沼意次側用人となる		
一七六八	明和五			光友、大森に大森寺を建立
				正法寺、元郷より現在地に移る
				光友、大森寺に常念仏堂を建立
一七七一	享保二			大森新田の千手観音が造られる
一七四三	寛保三			大森向山の一一戸見取所へ移る
一七六七	明和四	矢田川大洪水		
一七六八	明和五	大森向山の五戸定納山へ移る		
一七七四	安永三	正法寺、寺号を改め法輪寺となる		
一七八〇	安永九	法輪寺焼失		
一七八三	天明三	矢田川洪水		
一七八五	天明五	森孝新田、肥後守平氏宅の土蔵建つ		
一七八九	寛政元	矢田川洪水		
一七九〇	寛政二	上香流橋架設		
一七九二	寛政四	法輪寺再建成る		
一七九四	寛政六	大森、舟橋用水の水の利用をめぐって印場と争う		
一七九六	寛政八	森孝新田の三十三観音が造られる		
一八〇五	文化二	大森、野田用水の水の利用をめぐって庄中と争う		
一八一五	文化一二	矢田川洪水		
一八二二	文政五	露竹斎宇朗、「長久手道の記」を著く		
一八二六	文政九	森孝新田に八幡神社を勧請		
一八三一	天保二	法輪寺の三十三観音が作られる		

一七八五	明治一八	瀬戸街道大改修		
一七八六	明治一九	小原小学校小幡に開校	一七八五	明治一八
		大森、森孝の児童も小原小学校まで通学	一七八六	明治一九
		小学校再び法輪寺へもどる		伊藤博文、初代内閣総理大臣になる
		森孝新田、大森村に合併		義務教育小学校四年となる
一八八八	明治二一	濃尾大震災	一八八八	明治二一
一八八九	明治二二	雨池破堤、大森死者二名	一八八九	明治二二
一八九一	明治二四	大森尋常小学校現在地に開校	一八九一	明治二四
一八九二	明治二五		一八九四	明治二七
一八九七	明治三〇	陸軍歩兵第三十三連隊守山に誘致される		日清戦争が起こる
一九〇二	明治三五	国鉄中央線、名古屋―中津川間開通	一八九九	明治三二
一九〇四	明治三七	大森、酒井平吉氏宅建築	一九〇二	明治三五
一九〇五	明治三八	瀬戸線、矢田―瀬戸間開通		日英同盟成立
一九〇六	明治三九	大森村合併により守山町の一部になる	一九〇四	明治三七
一九〇七	明治四〇	瀬戸線が電化される		日露戦争が始まる
一九一一	明治四四	瀬戸電、大曽根―堀川間開通	一九〇七	明治四〇
一九一二	大正元	大森志水鋼三氏宅建築	一九一〇	明治四三
				義務教育が六年となる
				大逆事件
一九一四	大正三			第一次世界大戦が起こる
一九一八	大正七			米騒動が起こる
一九二三	大正一二			関東大震災
一九二五	大正一四	大森小学校に高等科がつくられ大森尋常高等小学校となる		
一九二七	昭和二	大森八幡神社現在地に移転		
一九三〇	昭和五	八竜山を月ケ丘分譲地として売出す		
一九三六	昭和一一	大森合宿盛大に行なわれる		
一九三七	昭和一二	献穀祭が大森の宮畑で行なわれる		
一九四五	昭和二〇	大森空襲の被害を受ける		
一九四八	昭和二三	名鉄瀬戸線、電車法輪寺裏で脱線転覆死者二六名		
一九四九	昭和二四	干害		
一九五二	昭和二七	大水害、大森橋、小原橋流出		
一九五四	昭和二九	守山町が志段味村を合併し		
一九五五	昭和三〇	守山市となる		
		集中豪雨、新池決壊		
一九五九	昭和三四	伊勢湾台風で被害		
		大森小学校南校舎倒壊		
一九六〇	昭和三五	日米安全保障条約が結ばれる		
一九六五	昭和四〇	日韓条約調印		
一九七二	昭和四七	日中間の国交が開かれる		
一九七五	昭和五〇	エリザベス女王来日		
一九七五	昭和五〇	守山市が名古屋市に合併され守山区となる		
		大森向住宅完成		
		本地が丘住宅および元浦住宅完成		
		大森中学校開校		
		法輪寺改築落慶大法要が行なわれる		
		森孝住宅完成		

あとがき

この本を書くにあたってずいぶん多くの方方にご教示をいただきました。

水野朝治組合長、志水清市副組合長を始め大森区画整理組合の方々には何度もお世話になり、貴重な資料を提供していただくとともに、いろいろと教えていただきました。なかでも笹山兼松氏には主として新田方面を、肥後守平氏には森孝新田方面を、臼井守久氏にはおもに古墳についてくわしいご教示をいただきました。また星野薫氏には自宅に伝わる貴重な古文書を見せていただき、その一部を拝借させていただきました。法輪寺、大森寺には境内を案内していただくとともに、多数の資料を見せていただき、酒井平吉氏にも自宅をくまなく見せていただきました。志水鋼三氏にはご病気中にもかかわらず会っていただいて、献穀祭を中心にお話をいただき、臼井作郎大森郵便局長には局に保管されている古い書類を多数見せていただきました。棒の手保存会長内藤金作氏、本校ＰＴＡ会長豊田寿一郎氏には棒の手と大森合宿について多数の資料を見せていただくとともに、くわしい説明もいただきました。また肥後時一氏には森孝方面を、丹羽くによ氏、加藤義孝氏宅では四軒家方面のお話を聞かせていただき、庄中向の加藤一之氏には当地の古代遺跡について親切にお話をいただきました。さらに志水栄氏には空襲被害を中心に教えていただき、浅見三枝子氏には山車の資料をお借りしました。また古文書の解説には市川督芳氏、資料の収集は森部正孝氏に協力をいただきました本校の社会科および国語科担当の先生方からは種々の情報提供、原稿の校正などでお世話になりました。大森自治会長寺田清氏および区画整理組合長水野朝治氏、本校ＰＴＡ会長豊田寿一郎氏にはご多忙のところ拙稿を読んでいただいて有益なご指導をいただきました。ここに深く感謝いたします。なおこのほかにお名前もうけたまわらずにいろいろと教えていただいた方も多く、まことにありがとうございました。

本書の発行が計画されてから出版までの期間がきわめて短くて調査も十分でなく、また筆者の能力の不足もあって重大な見落としや誤りも多数あると思いますので、その点をお許し願うとともにご意見、ご叱正を大森中学校の小林元までご遠慮なくお寄せください。他日、機会がありましたらさらに正確を期したいと思います。

なお本書の編集に際して、本校ＰＴＡ役員の丸山次生氏の並々ならぬご盡力があったことをつけ加えさせていただきます。氏はご多忙の中を本書に掲載された写真の撮影、編集、構成など一切を引受けていただきました。氏の絶えざる激励とご援助がなかったならば、この本が日の目を見ることはなかったでしょう。

最後に発刊に際して本校ＰＴＡの皆さん、地域の皆さんのご厚情に対し、厚くお礼申しあげます。

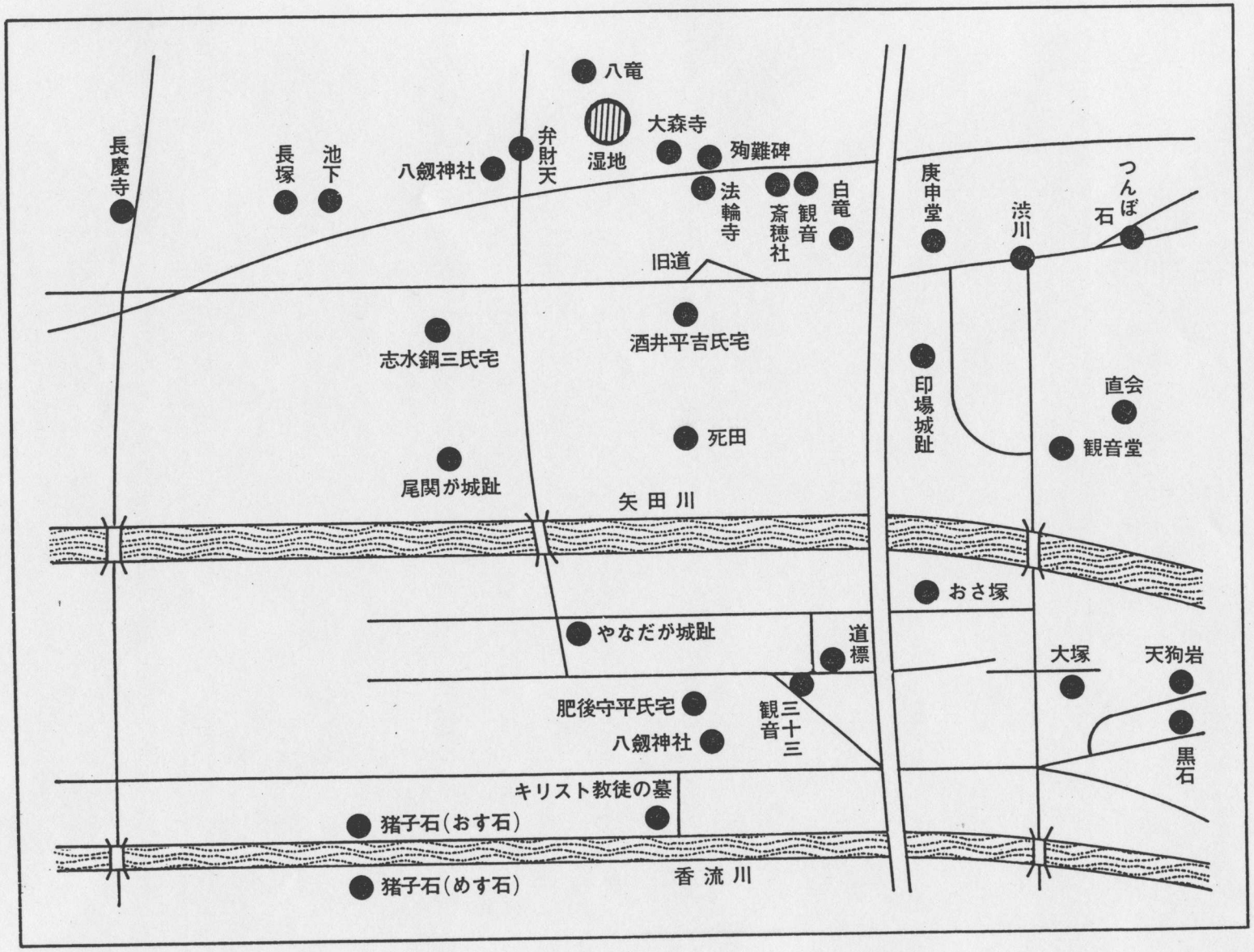
一九七五年　秋

参考文献としてそのおもなものだけをあげておきます。本文中にはいちいち引用はしませんでした。ご了承ください。

東春日井郡誌、守山市史、尾張旭市史、猪高村誌、長久手村誌、
寛文覚書、尾張徇行記、尾張名所図会、尾張地名考、尾州古城志、尾張雑書長久手道の記
柳田国男　地名の研究
藤岡謙二郎　日本の地名
内務省地理局編　地名索引
鏡味完二　日本の地名
北島正元　江戸時代
水野時二　尾張の歴史地理
なお本書に掲載した地図は、建設省国土地理院の承認を得て同院発行二万五千分の一地形図を複製しました。(昭五〇部複第一八五号)

《わが郷土》大森・森孝新田

昭和50年11月20日発行

編集＝名古屋市立大森中学校
発行＝名古屋市立大森中学校
名古屋市守山区大字大森字五反田398／ＴＥＬ 798－2900

大森・森孝歴史遊歩道（図12）